



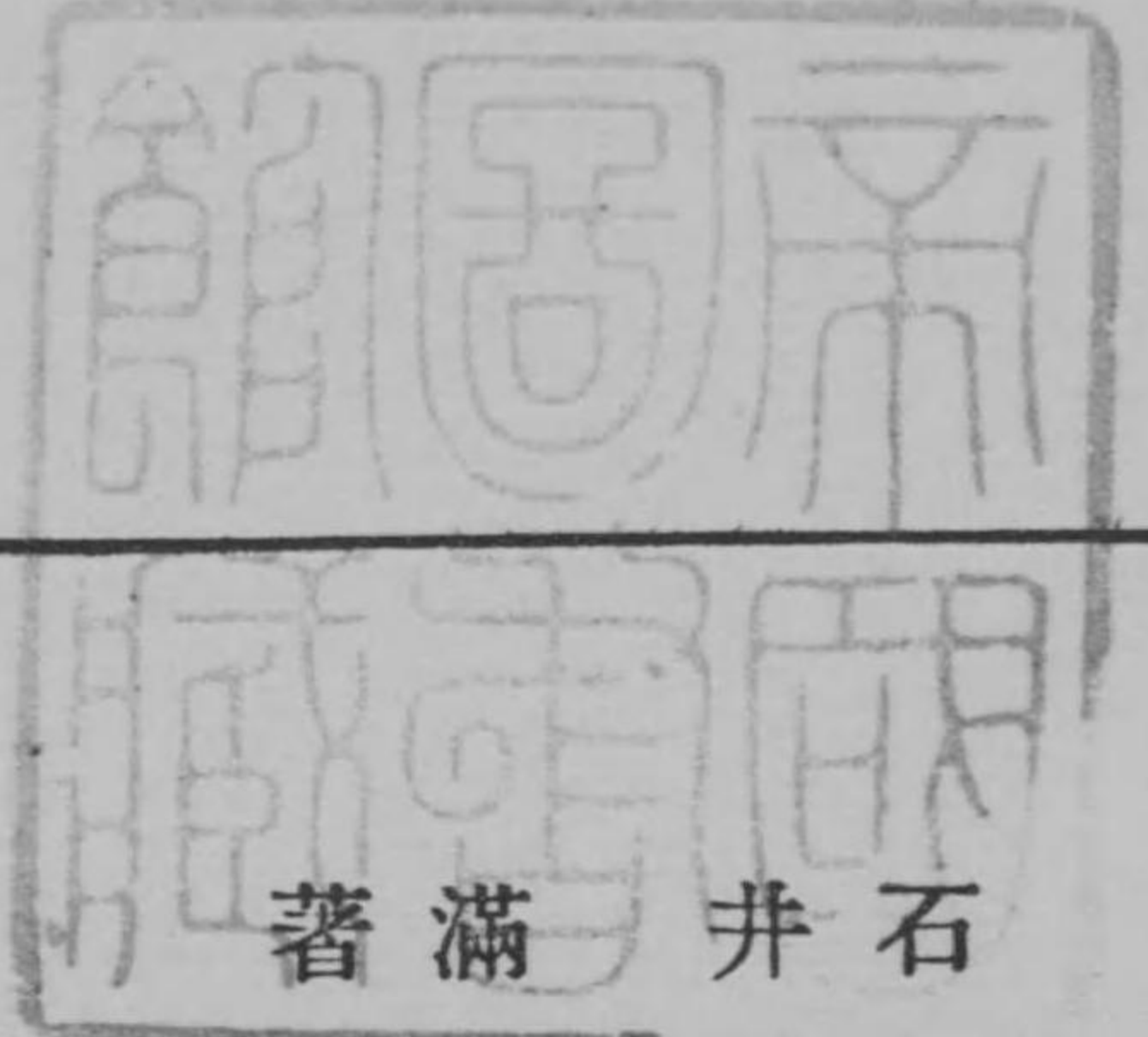
387
152



始



387-152



著滿 井石

# 會社と道鐵

1920

部版出年青道鐵

田神京東

大正  
9. 7. 6  
内交

自序

數年來公務の傍ら「文明評論」「内外時論」「鐵道青年」其の他婦人雜誌等に發表したる隨筆のうち其の比較的肩の凝らないもやうなものだけを集めて本書をなすに至つた。收むる所小品あり、生活問題、婦人問題に關する私見あり、時事に籍りて洩したる人格問題あり、何れも著者の小きき人生觀ともいふことを得べきものである。

從來官職に居るものは言論の發表には極めて臆病であつた。それ故に青年にして夙くも嬌斜の巷や酒盃のうちにいたましくも自己を殺して居たものが多いやうにすら見受けられる。これ著者の深患とする所である。此弊風を慨して折にふれて自己心中の感想を筆にのせ敢て人に問はんとしたことは「思想なくして人生なし」といふ著

Be Just and Fear not.

者平生の主張の發露に外ならぬ、唯再録するに及んで舊稿を閲するに既に時勢を異にし少くとも一部書き改むる必要を感じるものすらある殊に婦人問題に關する所説は其の後に至つて著しい變化を認めざるを得ない、近く三田書房から刊行される拙著「婦人問題管見」を併せ讀まれんことを希望する。

本書中「社會を眺めて」の一篇は家兄石井宗吉氏の筆に成つたものであるが所見を同じくする點がすくなくないので貫ひのせておいた讀者諒之

大正九年五月下浣

千駄谷の假寓にて

著者

# 鐵道と社會

## 小品四種

少年車掌の死……………一

ある貨物驛にて……………三

驛員と旅客……………九

遭難者の手記……………三

## 生活の一面

最近經濟界の新現象……………四

中下級社會の生活問題……………五

私の婦人観

婦人生活の社會化……………六五

職業婦人の諸問題……………六六

兩性問題……………六七

家庭に於ける婦人……………七〇

結婚の弊風と青年男女の交際……………七三

家庭と女中の問題……………七五

**社會を眺めて**

時代錯誤の喜劇いろく……………七九

汽車旅行の感想……………八二

乗客の公德心に就て……………一五八

春となりて新人愁多し……………一六五

**人格主義の提唱**

殺人事件を中心として……………一七五

花を見る心神に祈る心……………二〇九

信仰と事業……………二二二

個人と國家……………二二五



小  
品  
四  
種

## 少年車掌の死

××鐵道管理局××掛長小林勝氏は夜晩く自分の室に歸つてから、始めてホツト軽い呼吸を心から吞吐した。

小林氏は官吏たる本務の外に別に鐵道に關係のある學校に教鞭を執つてゐた、科目が科目だから一つ位内職として教へたからとて大した職務の邪魔にもなるまいとの先輩のすゝめに依つて、學校を出たばかりの年から講壇に立つて今では既に二年になる。若い先生も幾人かの學生を仕立てあげて、とにかく社會へ出してゐることが外に道樂のない彼にとつては非常に興味が多かつた、それに學生を教

へることは二重に彼れを悦ばしむるものであつた。——學校から月末に受取る一封に役所の方からの幾分を加へて遠く郷里に居る老父に送るといふ得難い悦樂が彼れを勵まして居たのである。

小林氏が例に依つて制服を書生流の紺の着物に着かへてやをら机の前に座ると、定まつたやうに郷里の新聞と其の帶封に挟むだ二通の手紙が彼れの注意を牽かすには置かなかつた。

其の一通は西洋封筒へ亂暴にかゝれた横文字と、波線状のスタンプが見るから西洋臭味のあるインクの跡を示して居るので直覺的に先頃、彼れの友人中第一に渡米した井口からだといふことを感得した。彼れは今日一日役所で何を處理し、學校で何を講義して來たかを忘れ果てやうな顔付をして、この封筒を表裏ともしげ

くと眺めて居た。

封を切つて手ざわりのいゝレターペーパーに走り書きの友の消息を読みながら彼れの表情は眞に夢を追ふ少年のやうな無邪氣さと憧憬とに充ちて居た、——當地の親聞は二段抜きの特號活字の見出しで僕の意見を紹介して呉れた、眞に自由進取の氣が漲つてをる。君！若いものは一日も早く來るべき土地だ、なご新聞記者をしたことのある井口は例に依つて輕妙な筆で着米早々の氣分を知らしてよこしたのであつた。

彼れのあたまには白聖の大建築だの、氣持のいゝ並木街だの、さては繪に見るやうな西洋婦人なごが織るが如く往來して居る文華の國の都會の光景がまさしくと浮むで來た。



彼れの勉強室は寂然としてをる時々新宿御苑の方から鶴の朗かな鳴聲がして來るばかりであつた。

二

彼れは夢から醒めたやうに今一通の手紙をとりあげて見た、走り書の拙い文字差出人の名には記憶がなかつた。——又あの學校の卒業生の職務上の注文かなと思つた豫感の外れなかつた、ノートを破いたらしい野紙には左の如き嘆願文が認めであつた。

前略——私は自分が骨が折れるのを嫌ふのではありません、唯六十を越した父母が、私が乗務をして居る間は安心して眠ることさへ出來ないと云つて居ます、それが私にはつらくていけません。

ほんとに我儘勝手な御願ひばかりして申譯ありませんがどうか列車に乗ることだけはやめるやうに先生の御盡力ですていたゞけませんでせうか。  
この御願ひが聞いていたゞければ御恩は死んでも忘れません。  
憊うした意味が細々と認めてあつた。

普通ならば『何だ勤め人が任地や任務に文句を並べるといふ法があるものか、自體今の人間は勝手すぎる、一人一人がそんな注文したら集團的の事業は結局その個人の我儘で破産する外はないぢやないか』とでも云ふべき所だらうけれども、此の拙い文章ばかりの衝動を彼れに與へたやうであつた。前の井口のそれとは全然異つたあるものを彼れに感じさせずには置かなかつた。  
自分だつて、やれ國に老父が居るの、東京でなくては勉強が出來ないの、學校

を教へることをやめれば収入が減つて困るといふ事情でもつて、東京に嚙りついて居るくせにどうして人の嘆願を一も二もなくあたまたまから排斥することが出来るだらうか、と彼れは思つた。——世の中の強者は意識しないうちに我儘なことをやつてをる。自分の行動には十分の辯解が立つと思ひながら人には許さないことが多い自分の場合だけが特別製だと考へてをるものが少くない。

恚う考へて彼は即座に筆を執つて其の願意には自分も相當に骨を折つて見やうから當分は今までの勤務するやうにと返事をしてやつた。

三

その翌日彼れは間違なく××の車掌監督に電話をかけてそれとなしにその少年の轉勤を依頼して見た、實は彼れがこれと同様な依頼をすることが前にも二三度

あつた。その度毎に相當骨を折つてどうやら都合をしてくれたのだが同じやうなことが頻發するので彼れもさう力づくよく依頼することも出来なかつた、電話をかけながら、何だつてこんな思ひをしながら人の世話などをする氣になつた。うらうといふ氣もしないではなかつた。——とにかく何分宜敷といふので電話を切つた。

丁度其の時給仕が××評論のMといふ人が尋ねて来て應接に来て待つて居ると云つた、兼ねてから雑誌などに關係することの好きな彼れは又何か原稿の依頼かと思つて今の電話のことなどを忘れたやうに快濶な顔付になつて應接室へ行つて見た、其處にはMが棒立に突立つて赤切符を持つてソワ／＼として居た、彼れは一寸面喰はないわけにはいかなかつた。

M氏の用事は雑誌の用でも何でもなかつた、土浦まで用事があつて行つた所だ

が何か切符のことで車掌が不親切であつたとか何とか云つてブン／＼不平を訴へて居た。車掌といふことを聞いて彼れは又電のやうに今の電話のことを思ひ出した。老父母まで心配して乗務だけはやめさせやうとして居る彼れ等の一團と其れを知りつゝ、今のやうな手ぬるい電話をかけたこと、――すまないやうな、仕方がないやうな善いとも悪いともつかぬ心持が再び湧き上つて來た。

彼れは何分數が多いからとか、乗務の人間も骨が折れるのだからとか云つてうまくM氏の怒りを解いてやつた、そしてM氏を管理局の玄關まで見送るときはもう××評論の論説の批評や販賣方法のことなどを隔意なく話して居た。其の日も割合に多忙しかつた。

四

忘れるともなしに一ヶ月ばかりは經つた。

ある日彼が再び學校から夜更けてから歸宅して見ると彼の少年と同じ苗字の差出人の手紙が來て居た。――又あの催促かと思つて急にこの一ヶ月何等彼れのため特別に奔走もしなかつたことを心に疚しいものゝやうに思はれずに居られなかつた。

しかし書面は彼れの心をもつと動かさずには置かないやうな事件の報告であつた。

色々御世話に相成候、悴××事件日例に依つて乗務中水戸驛附近の列車事故の爲め重傷を負ひ、其の後手當の甲斐なく死去、……在學中は勿論卒業後も一方ならざる御高配……其の御鴻恩に酬ゆる期もなく……

攻められるやうな罵しられるやうな思ひをしながら彼れはこれ等の文字を繰り返し繰り返し読み直して見た。

少年車掌君U・Kは死むだ、立派に職務に殉じた。併し彼れはその死の責任の大半が自分にあるやうに思はれてならなかつた、拙い文字、それに老父母が安眠も出来ぬ程心配してをるからとまで事情を訴へて来た可憐の少年の心持が今になつて犇々と彼れの心に迫つて来る、何分宜敷位の電話一回であれだけの期待と信頼にお茶をにごして置いた自分の背信、彼れはもう何等辯解の言葉さへもたぬまで自分の非を責めないわけにはいかぬ。

ある醫者が云つたことがある、自分の全力をつくしても病人が助からなかつたとする、程經て新研究が出来てその病氣がやすくと癒せると解つたとき位いや

な氣持のすることは無い、併し自分は當時としてはやはり全力をつくしたのだからと云つて良心に何等疚しいことはないと言つて辯解してをる、左様でもしなければ到底やつてゆけないから、と。

彼れも一切を當時としては仕方のないなりゆきだと辯明して見た。自分だけで出来ることでないから、人の力も埃たねばならぬことだからさう手早くは埒がつかないのだ。やはり少年の運が悪いのだ、現にもつと手軽に安々と希望をかなへるやうにしてやれたことも澤山あるのだから、少年に運がないのだ。彼れはかく考へることに依つて少し安心した。——しかし今日まで彼れは遺族に對して申譯がないやうな思ひをつつけてをる。

ある貨物驛にて

『オイ此の石を擔いでかういふ鹽梅に歩いてさ、おとさねエ様にソつと卸したものにや褒美をやるぞ。誰れかやつて見ろ、誰れかやつて見ろ』  
 長い間貨物驛夫を務めあげて相摸取りのやうに形もなくなつた耳を自慢にして居る世話役は斯う奴鳴つてあたりを見廻はした、貨物の山の様に積まれた上家のなかは薄暗く濕めつぽかつた、其の芥でポコトとして居る地面には白墨で、丁度足が入る位の丸が晝いてあつて、ものゝ十歩ばかり入れちがひに二列並べた先に一つの丸で止つて居た。

『あすこでクルリと廻はつて斯う戻るんだぞ、いゝかそこが六かしのさ』

世話役は又促す様に説明して見せた。

だが十人に近い頑丈な若者共もツルツルした卵形の石に一つは三十六貫一つは十八貫と刻むであるのを見つめるばかりで互に、

『手前やつて見ろ』

『お前先にやつて見ろと』

譲り合つて居た。

『ドレ一つやつて見るかな』

と云つてとても見込のなさ相な男が野次半分に飛び出した時には一同の顔色に明かに冷笑の意味が浮むで居た。そんなことには頓着なしに其の若者は自分も亦おどけた笑ひ顔で一と抱にあまる石に兩方から手を廻してエツと云つて二寸も動か

したと思つたらすぐ抛り出して、

「駄目だ駄目だ。——やつぱり南京米ぢや力が出ね」

と云つて自己を嘲る如く高笑ひをした。

「生地いくぢのネー奴やつだ、女おんなばかりおつかけて悪いことばかりして居るから力ちからも出やしね」

と世話役は口ぎたなく罵ののしつて居た。

それに勢いきまひを得た二三人が代る／＼試こみたがドス黒くろい卵形たまごがたの重おもいものはなかなか胸むねから先さきへは持つてゆけなかつた。何が籠こもつて居るか不可解ふかかいな魔物まもののやうにぞつしりとした重味おもひを示しめして居るばかりであつた。

「何なにしろ手が這よつてかなわネ」

なごと云つて居た。

そのとき人々ひとびとの後うしろに初はじめから無言むごんでヂツと石いしを見て居た若者わかものを目敏めびやく見附みつけけた世話役は、

「××お前まへやつて見ろお前まへなら屹度きつと出来る。——おれが三十代だいの時にやこんなものは譯わけなかつたんだがな、今いまぢや膝ひざまでがあぶネ」と云つた。

「俺おれにもだめだらう」

「そんなこと云はねで試やつて見ろたら」

「お前まへに駄目だめぢやこゝで從したがふものは一人ひとりもあるめエ」

「それぢや兎とも角かどためして見るかな」

彼れは斯う云ひ切ると今までの逡巡に似ず、如何にも落着いて石の方に及び腰になつて近づいて行つた、彼れが一瞬間其の卵形の重いものを凝視して呼吸を止めた。思はず識らずあたりは堅睡を飲むた、悠容少しも迫らず彼れの手が石のまわりにかゝると其のツル／＼なるものが極めて従順に云ふことをきくもの様にすら見えた、そして彼れの満面にサツと紅が見えて太い眉のあたりがビリ／＼と動いたと思ふと其の卵形の重いものをやすやすと胸のあたりまで上つたがエツと云ふ氣合と共に次の瞬間には肩の上のつて居た。

『ムーツ』。

と感心する聲があたりからして來た。

彼れは大またに白墨の圓形を一つ一つ規則正しく踏むで世話役がやつて見せた様にクルリと廻つて又戻つて來て、靜かに石を膝から大地におろした。ドンと重いものが地ひゞきをさせておりたときにはさすが彼れの額に汗が滲むで居た。

『大した力だネ』。

『やつぱり見込は違はねもんだ』。

一としきり感嘆の聲があたりに交はされて居た。

丁度この力試めしを見て居た私は人間の力が見て居るうちに消耗してゆく様にすら感じた、おどろきのなかにも人間の強ささへも感じない譯にはゆかなかつた。

『ごうもえらい見物をしました、大きにありがたう』

憚う云つて聊か其の勞を犒ふ積りで人々に麥麵でも取るやうにと少しの心づけを

ソツと世話役に渡して歸り途についた。それを辭退する様にしながらも受取つた  
世話役は、

「や本當に懸賞だ懸賞だ」と云つて居た。

私共が驛を出る時に世話役が丁度敷島の箱を幾つかもつて、

「麥麵よりかこの方がいゝ相ですよ」。

とニコ／＼愛想しながら彼等の一團の方に急いで行くのを見た。

「なる程腹にたまるものばかりが結構なものではないのですネ、あの人達には  
一本の糞が労働の疲れを慰める何よりのものなんですネ、無理はない無理はな  
5」。

恚う同行の人達と話しながら歸り途を急いだ。

### 驛員と旅客

「ア、モシ／＼其んな所で用達をされては困りますネ」。

「何んだ、鐵道の線路なんか垂れ流しぢやないか、便所が無えから仕方無えぢ  
やないか。生意氣な事を云ふな」。

「便所は外にあります。ホームは便所ぢやありませんよ」。

「分つて居るよ、五月蠅な、こんな小ぼけな停車場に勤めて威張るない。こゝ  
が便所で無え位は酔つばらつて居たつて分つてら5」。

改札係は急に黙つて下唇を噛むだ、叱正すべきこと主張すべきこと、それは  
數々ある、しかしそれは今は無益であることを彼れも悟つたらしかつた、この騒



ぎにあたりの乗客も目を見張つたし同僚も室内から出て來たのであつた。法規違  
反を楯に取つて云ふべき理屈、それも知つて居る。同僚の目は期せずして強くな  
れ強くなれと力づける様であつた、それにも拘はらず年のゆかぬ彼れは公衆環視  
の下でそれが見す／＼正しい職務上の権利であるにしても氣が隠したのであつ  
た、それに相手は聊か誇大して居るにしても酔つて居るには相違なかつた。見の  
がせるだけは見逃がしてゐらうと云ふ心持もしないではなかつた。

丁度其の時これも酔漢と同じ年配のいやに脂切つた二重廻しを着た男がそれを  
抑へて、

『仕様のネー奴だな、貴様が悪いんだぞ。文句云はずにこつち來い、こつち來  
570

と襟首をこ衝くやうにして待合室につれ込んで仕舞つた、件の男はテレ隠れに  
何口かのなかでブツ／＼云ひながら酒臭息いを吹廻した。あたりの人も驛員も悪  
く黙して氣無味な瞬間がつゝいた。

×  
私の心にはあの酔ひしれた男が重役室で平蜘蛛のやうになつて居るありさまが  
×  
皮肉にも浮むで來た。

遭難者の手記

一

十丈もあらうと思はれる溪川に丁度枕木を並べた位のまばらな粗末な丸太を梁木に横附にした橋があつた、橋の下には大きな巖石がゴロ／＼して居て川が瀧津瀬のやうに其の岩の間を流れて居た。

突然白や赤い帽子を被つた少年が十人ばかりマラソン競争のやうな勢ひでこゝまで驅けて來たが皆のものが何等の躊躇なしにこの危つかしい橋を渡りはじめた、アツと思ふ間もなく先頭の一人が彈丸のやうに丸太の間から墜落した。私は全身がゾーツとするやうに感じた、すると其の少年は橋臺の木と木の間で左手だ

けをはさまつて宙にブラ下がつて居る、大勢のものが急にどこからか出て來て橋臺を傳はつて其の少年を救はうとしたがなかく／＼上げることが出來ない、突嗟の間に誰か足で少年の肩を押した、少年の手はスルリと抜けて其の代りに頭から眞倒に岩の上へ落ちる、ヤツ死ぬな！

斯う思つた瞬間に私は夢から覺た。全身にビツシヨリ汗をかいて居た。私の頭腦のなかには未だ今の夢の残りがあり／＼と映つて居る、靜かに手を胸にあてると心臓が激しく鼓動して居る、漸く覺たといふ意識がはつきりとして來た。私の室には誰も居なかつた、光澤消しの球を着せてあるほの暗い電燈が淋しく照して居る、室は天井も壁も白いけれどもよく見ると色々な形をした染があちこちにあつた、室の隅にあるヒーターが時々コト／＼と鈍い音を立てて居る。其

の傍に先程Sが届けてくれた目のさめる様なベコニヤと淋しいブルム、ローズの花が笑ましげに私を見守つて居てくれた。

私はソツと頸をうごかして見た。其の瞬間に頬から頸の下の方にかけて一面に押へられるやうな壓迫とムツ痒いやうな痛さを感じた。

二

私はまだ戦慄を以てあの當夜のことを思はずには居られない。

TとOとそしてKと私の四人は東京に居たからとしても別に面白い土曜と日曜をすごせる身分ではなかつた、そんな關係から誰いふとなしにS市まで旅行しやうといふ相談が一氣に纏つて仕舞つた、しかしいざ行くといふ段取となると少し臆切でない譯でもなかつた、それより近い所へ本でも持つて行かうとか、梅見な

がら近郊の早春を散歩しやうとか色々な議案も出たがそれはみんなS市が北方の寒いまだ雪のある都會だかといふ口實の下に立てられて居た。

『併し一度定まつたのだから決行しませうよ、そうでないと何時になつても行けつこありませんからね』

と誰か云つたのが斷定的のものとなつてともかくも毛布でも持つて行くとしやうといふことになつた、丁度教授用の靴と毛布一枚を持つて私が自分の宿を出やうとした時に先頃からしつこく云つて寄こす不愉快な手紙が一通あつて又かと思ひながらきまり切つた用件が私の心を暗くした、旅立前の氣分としてはむしろ幸先悪い様な氣までした、それでも私が山手線で上野について雑然たる旅人の群に入つた瞬間に其の不快は煙のやうに忘れられて居た、貰の煙で朦朧として居る待

合室には色々な國の訛のある聲が高らかに交はされて居た、カラン／＼といふ下駄の音も喧しかった、何時でも感ずる旅のあわたしい情調が私の心を軽くせずには置かなかつた。

その人混みのなかにTがやはり旅すがたで來て居た、少しおくれてOも嫣然してやつて來た。

『どう／＼行くのですネ』。

決意の斷行に伴ふ愉快さが三人の胸に共通に流れて居た、Kだけは急に歸省することになつたので一行から除けたといふことさへも自分達の決斷を力強からしむるに足るやうに皆思つて居た。

『君は用意がいゝね、僕は毛布だけは残して來て仕舞つた、ごうも眠られはし

ないのだからと思つて』。

『僕は急いですつかり櫛を持つて來ることを忘れちやつた』。

『いや僕も忘れましたがネ途中で買つて來たから大丈夫君も使用ひたまへ』。  
などと女學生の遠足のやうなことまでも云ひ合つて居た。

三

汽車のなかは大變な混雑さであつた、改札口を押し合ひし合ひして改鉄を受けから長いホームに出ると申し合はした様にガラ／＼と駆け出して無二無三に明いて居相な箱に飛び込みざまありどあらゆる品物を横たえて銘々が自分の一夜を明かすべき十分な座席を爭奪するのであつた。

『ア、たまらない、しかし漸くこれで青森まで少しは眠られ相だ』。

『どうも實に込みますね』

こんな言葉を誰も云ひ交はして居た。

私の前には新婚者らしい二人が新しいスーツケースと小鞆で城を築くやうにしてその間にラクダの毛布を敷いて行儀よく並んで居た、それさへもあそこからあそこから赤帽が擔ぎ込む荷と旅客の爲めにせばめられて寄り添ふ様になつて居た。

私達は勿論三人ともバラ／＼になつて仕舞つて居た、相當距離を隔て、話しをするのはあんまりいゝ氣持のものではなかつた、人なかで殊更に作つた様な話をしなければならぬ氣分はそれが例令意識しない程度のものであつても私達の旅情としつくり合はなかつた、其の意味で私達はどうしても外に空席を三人を圓く

容れる位の空席を捜さねばならなかつた、その位のことでは旅行に馴れて居る私達には容易なことであつた、旅客が少し落ついてから互に二三の箱をのぞいて見たがそれは無益だつた、ごこも／＼すし詰めで身動きの出来ない程であつた、私はホームを急ぎ歩いて來るとき割合にすいた一等車に若い西洋人がゆたかな體を車窓に凭せて居るのを瞥見したことをフト思ひ浮べた、丁度その時〇だつたか、

『一番前の三等ががらあきですよ』

と云つて來た。

『それぢや行かう、こゝぢや話も出來はしない』

『アツチの方が氣樂ですよ』

こんなことを話しながら急に空席が出來たのでモチ／＼しながら左右に開くや

うに座り直す若夫婦づれを残して三人は急いで一番前の三等車に移つた。

『何だ馬鹿らしいこんな明いてるぢやないか』

『二等の切符を買つたからつて何もあんなに込み合つて乗らないでもよさ相なものだネ』

『それが虚榮といふものさ』

急にのびくした三人は機關車のすぐ次の座席に腰をおろして他愛もなく話し出した。

人が少い故か残更に車輪の響が私の胸に答へた、氣がついて見ると客車の電燈と月の光とに照されて機關車のランダーの尾を付いて居る番號が無氣味な程黄色に光つて居た、レールの繼ぎ目にあたつてガタン／＼と云ふ音がするぞい響をさ

せて居た、私は奇妙に怖えて來た。

『君、こゝだけは止さうよ機關車のすぐ後だ一寸當られたら人間なんぞベツチヤンコになつて仕舞ふからね』

TもQも素直に同意した私は最後端にゆきたいやうに感じたけれども丁度其處には若い藝者が三四人とお店者らしいものが二三人野聲を出して談笑して居たので中央の明いた處へ三人むき合つて座つた。

ごこの邊を走つて居るのかしらないが春には珍らしい寒い月明の車外の景色は黄金色の夢の國のやうにチラチラと旅客の目に映じて去來して居た。

車中檢札に來た事務車掌は私を見て氣の毒に思つてか。

『水戸までゆけばすいて來ます觀梅客が餘程乗込んで居ますから』

と愛想を云つて行つた。

四

幾時間を経てからか知らない私達が四方山話にも倦んで食堂の安價な紅茶を飲むで座席へもどつてから三人は別々になつて少し休まうといふことになつた。

私は鞆にもたれて何時とはなしにフト夢の世界に入りかけた、汽車の震動のため決して安眠の出来る私ではない、やがてつくべきS市の友人のことや自分が今筆を執りつゝあるN時論のことや、様々な空想や考へが不安らしく頭腦のうちに相交錯して居た。

其の瞬間だつたズシーンと大きなショックに私の夢は忽ちにして驚かされた、ガラガラガラと瀬戸物屋の破壊されるやうな響とメリ／＼とする音が物凄くあた

りにゆき渡つた、破壊だ、革命だ、暗黒だ、そして死だ、全世界が大混乱だ、私はその叫喚の真唯中になほ夢に夢を見る心地で居た、安寂と、永遠が私の前にある様であつた、スルどどこからか一面に煙が舞ひ込んで来た、それが胸ぐるしい程あたりに立單めて仕舞つた、『斯うして居れば窒息するな』突然こんな考へが私のあたまたまに浮んで来た。

その刹那にごく静かであるが巨大な死に對する反抗力が私の全身に甦つた、見當もなしに私は破壊物のなかからぬけ出やうとした。

『馬鹿なことをしたもんだ、あり得べからざることがあつたな、ベツチヤンコになる處だつた』

こんなことを考へるともなしに考へて、私は活動寫眞の冒險役者がやる様な所

を切りぬけつゝあつた、もう少し考へる餘裕が私のあたまに出て來た。

『生きて居た、少くとも自分だけは動いて居る』

微に斯う認識した、其のとき友人の安否が氣づかはれて來た。

氣がついて見ると私の胸一面が生ぬるい鮮血に染むで居る鼻血かしらとハンケチをあて、見たが月の光に見るとそれらしくもない、私は事件の大きいことと無意識のうちに受くる損害の大きかるべきを憶つて明るい客車の方に駆け寄つた。二丈もあらうと思はれる堤から斜に田圃に落ちた機關車の車輪の空轉と汽笛が夜氣のうちに鳴りひびいて居た、私達をのせた客車と其の次の車とは影さへ見えぬ位に激碎されて月あかりのもとに人がごよめいて居るらしかつた、後についで居る客車の明るい窓からは驚いた旅客の顔が眞黒に見えて居た。

漸く洗面室に入つて見ると自分の顔はものすごい程傷ついて居た、痛さは感じないが鼻血のやうにタラ／＼柘榴口から血が垂れて居た、死線はのがれたが負傷はして居る、恚う思つた時分に漸く寒風に晒された傷口がヒリ／＼と痛み出して來た、拭つても拭つても血は止まらなかつた、出血の夥しい爲めに卒倒するといふことを思ひ出して力強く局所を押へつけながら再び車外へ出た私はそこに私を尋ねて居たTとOとを見出した、相抱いて互の無事を祝福したのだつた。

五

病室の外は長閑な春であるらしい。さすがにこゝにもあたゝかい春光が白いカーテンの間を洩れて室内にゆらめいて居る。

私は長い病院の廊下を歩いて居るときフト窓外の芝生が一面に青色にかはりつ



あるのを見て春の氣分を三尺の窓越しに掴み得た様に考へて見たりした、同時に今までは何とも思はなかつた顔一面の繻帯がひざく邪魔になり出して來た、顔の傷跡の大きさが氣に病めて來た。

助かつたに相違ない、傷も案外軽かつたに相違ない、本當に『大難が小難ですんだ』のであつた、若しも眼球でも失つたら、若しも腕でも挽ぎ取られたら―其んなことさへ容易にあり得る塗炭場であつたが、其れに比較すれば神にも謝すべき天恵であると思ふべきだ。

併し二日髯を剃らずに居ても氣になる平生の性分の私から思へば醜い顔の傷は決して輕少な犠牲ではなかつた。蚊に刺されてさへ好い氣持のしないものを何等の武裝なしにあの破片のなかに暴露せしめたことを思へば慄然たらざるを得な

50

フト私は幾萬の精靈をひと纏めにして砲火的とする戦争のあることを思ひ浮むだ、顔の傷や、瘡跡の心配などは天から考へて居られない人生殺戮場のその凄惨な光景をさへ想像して見た、左様でなくとも不十分な生活費を得る爲めにあの晩の機關手や機關助手のやうな運命になり易い地位において勇敢に作業しつつある可憐の同僚を思ひやつた、おゝ文明の惨害よ。

『若い方の顔面のことですからあんまり跡をつけたくありません』  
毎日斯う念入りに處置をされるドクトルの好意だけでさへそれを思へば贅澤であるとも云はれる。

左様かと思ふと又切られ與三郎とか蝙蝠安とか、顔に瘡跡のある人間にろくな

人間の無いことを考へて見る女の方では累にしろ、お岩にしろ醜いものにはすさまじい程執拗な人が劇にすらある、私は私の頸のあたりを幾度か撫で、見た、そしてなるべく目立たぬものであれとも考へた、突然これが妙齡な女であつたらとも思はれたそんな不安や諦めやが狙徠して居る間にもある西洋の婦人が數冊の書物と共に届けてくれた一冊の聖典が一日増しに私の心の偉大な安慰と信念を與へつゝあつた、如何なる犠牲を支拂ふにせよ靜かに今得つゝある私の信仰が生涯に又と得難いあるものである様に感ぜられて來た、低級な婦女子の氣にする様なことは輕々と心意のうちに解脱することが出來たのである。

傷が醫局の人の云ふ處に依れば経過最も良好といふので一日と快くなるにつれて平生に復せんとしつゝある私の心には様々な姿が現はれたり消へたりして行つ

た、殊に二三日の如きは瘳猛な悪夢を續け様に見て自分ながら無氣味さに戦慄したことであつた。これが續いて行つたら左様だ『狂』だと考へることさへあつた、その狂暴な悪夢すらも二三日で忘れた様に見られなくなつた、食むが如き睡眠と食慾を感ずる様になつてからは又耽々たる平和な晝と夜とが續いて行つた。

生活の一面

## 最近經濟界の新現象

— 運輸通論の開講に方りて —

今日から運輸通論の講義を致します、御承知の通り私は別に鐵道法規を受持つて居りますから、此の二課目に依つて能く鐵道の經濟的觀察と法規的組織とが研究され、之を能く體得することに依つて鐵道の營業方面の大綱が理解されること、信するのである。而して鐵道の經濟的研究を始めます前に、一體現在の様な驚くべき交通機關の發達を見るに至つた時代は如何なる特色を有してゐるのであるか、換言すれば鐵道の發達今日あらしむる原動力となつてゐる現代社會の經濟的

特色は何であるかと云ふことを、前以て説明して置くことが必要であると思ひます。

それで第一にお話申さねばならぬことは、今日は世界文明國は概して農商工業が共に盛に行はれて居るが、殊に商工業に重きを置いて居ると云ふことである、フリードリッヒ、リストと申す學者は國民經濟發達の歴史を説明するに方つて五つの階段を分ち、(1)狩獵漁業時代、(2)牧畜時代、(3)農業時代、(4)農工時代、(5)農工商時代として居ります、つまり吾々の祖先の時には、女は家を守り男は山河に出で、鳥獸を狩ることをのみ業として居たこともあるし、其れから少し發達しては自分で其の獸類を飼養するに至つた時代もある、少し進むで人類が一定の土地に永住する風習が着くに至つて爰に農業時代となるのであるが、この時代には未

だ所謂自給自足の經濟時代であつて、今日に於ても諸君が片田舎や山中の農家に於て見らるゝが如く、米麥も味噌醬油も反物も下駄も草履も、何から何まで一切自分の家で作つて自分の家で消費すると云ふ始末であります、然るに商工時代、殊に現代の如く、農業も商業も工業も相並むで著しく發達した時代に於ては、既に此の自給自足と申す仕組が根柢から破れて參つたのである、僕達も將來に研究せんとする鐵道の如きは決して自給自足時代には想像だもされなかつたのである。

二

然らば現代は何を特色とするかと云ふと、交易と云ふことが盛に行はれる處に新らしい色彩があり、社會の凡てが交易と云ふことを本にして出來上つてゐるの

である、殊に交易と申しても其の極めて幼稚なりし時代にあつては物々交換で、獵師は其の得たる肉を以て欲する穀類を得、百姓は其の收めたる穀類を以て其の足らざる肉類を得ると云ふ様な風であつたのであるが、物と物と取り換ると云ふことは一寸見ると極めて簡單で便利の様であるが、實際になるとなかく以て簡單ではないのである、何故がなれば、物に依つては分割すると其の値段が著しく減するものもあるのに、甲と乙の要求する處が思ふ様に合致すると云ふ譯にはゆかぬのである、例せば、甲は米十五俵全部を以て反物三十反と取りかへむと思ふとき、乙なるものは反物を五反しか有して居ない、然るに味噌なら澤山持つて居ると云つた具合で、なかく思ふ様にはゆかぬ、慙うなると直接物と物と交換すると云ふことは却つて不便であるからと云ふので、誰れ彼れの別なく欲する所

のものをば、之を標準ともし方便ともせんとして、爰に貨幣と云ふものが出來たのである、自給自足經濟が破れて、交易を中心とした分業と云ふことが行はれて來て此の貨幣が生れたのであるが、此の貨幣の出現は又分業制度を著しく發達せしめたことは勿論のことである、即ち彼の貨幣なるものは直接役に立つ物ではないが、之さへあれば吾人は如何なる物でも手に入れることが出来るのである、されば物々交換とは異り物を得んと欲する人は先以て貨幣を得、然る後其の貨幣を以て自己の欲するものを求むるのである、この邊のことは詳細を話したら際限がないから極くかいつまんで、大體のことだけを述べるに止めておく、殊に唯今では又貨幣取引を通り越して信用取引の時代になつてゐるのである。

交易と云ふことを根柢とした分業組織は、實に商工業をして今日の發達を得しむるに至つたのである、最早や今日の工業者が製作する物品は、決して自己の使用に供せんが爲めではない、否、廣く世の中の人々の需要に應せむが爲めにするのである、諸君は何も六かしく考へるには及ばない、一度自分が使用してゐるものを考へて見れば分る。着物も帽子も靴も學校用品も、すべて自分若しくは自分の家で作つたものは一品もあるまい、凡て他人が作つたものである、諸君はそれを親の脛を嚙つて得たのである、——これは笑談であるが、大人でも決して自分の使用するものを自分では作らない、皆お金で求めたのである、早い話が如何に不器用な僕の様なものでも、金さへ有つて居れば東京に居れば決して困ることはなし、三越へゆけば頭の先きから足の先まですべての入用品を求むることが出来る

ではないか、これを昔日ピンとと糸を紬ぎ、バタバタと織つた僕達の祖母の時代と比較すると、丸で夢の様な話である、そればかりでない、其の金を出して求めた品物の方が自分で製作したものより遙かに安あがりで見派がよいのである、例へば女學校出の奥さんが料理の本を見ながらこしらへたものは案外金がかつて居てまづいが、二十錢も出せばどにかくカツレツは食はせる處があると云つた具合で本當に『餅屋は餅屋』である。

何故『餅屋は餅屋』かと申せば、それが分業のありがたみである、よく引用される實例であるが、如何に手先の器用な諸君でもあのペンを作ることが出来るか、よし出来たにしても一本作るに一日もかゝれば、日給六十錢で五割の手當を貰へる諸君とすれば一本九十錢のペンになる、然るに一本ごんなに物價騰貴でも一錢

か二錢で求めることが出来るのは全然分業のおかげである、分業と云ふことには種々な面白い説明が出来るが、今日は本問題を急ぐからこんな停車場へは寄つては居られない、然しながら此の分業の制度が發達するためには澤山同じものを製作し、其の製作したものがドシム、賣れると云ふことを必要とするのである、一時に同じものを澤山作れば第一原料が安く買へるし、其の製作の手間が省けるし、其の製作の雜費が節約される結局、安くしてそして見派のよいものが出ることになる、六づかしく云へば、大量生産と云ふことは以上申した色々の利益があるのである。

四

現代の工業が大量生産を目的として莫大な資本を利用し、大きな器具器械を利

用し、而して多數の職工を使用して經營されて居ることは諸君が見らるゝ通りである、而して如斯工業の發達は遂に人口の都會集中を促すに至つた、家庭工業が破れて工場工業が勝利を得たのである、先に申述べた通り自給自足時代は勿論、交易が行はるゝに至つても其の初のうちは工業は多く家庭で行はれた、今の大工や桶屋の様に、内弟子や徒弟を置いて小さい工業をやつて居たのである、然るに此の小規模なる家庭工業が破れて工場工業が勃興して來ると、それと共に色々研究すべきことが生じて來る、工場工業は大器械を利用する工業であるから器械工業と云ふことも出来る、然るに家庭工業にありては器械を利用せず簡単な器具や道具を用いたのである、元來吾人々類が遙かに他の生物より優越して現世界に跋躡して居る所以は、實に人間が自分で器具器械を利用することを發見したからで



ある、河上博士はこの邊のことを極めて巧妙に説明して居られる、則ち吾人々類は別に鋭利な爪牙を有せざるに他の群獸を壓倒してゐるのは、人間が後足で立つて前手を自由に活動し得る状態にあるからで、吾人は此の手を以て種々の器具器械を製作し、之を自己の手の延長として働かしてゐる、防敵に、生産に、此等の器具器械が與ふる力と云ふものは到底鳥獸の爪牙の比ではない、何等自己に強味を有せざる人類も、一度之を利用すれば世界の最強者となり得るのである、而して通常人々は一様に器具器械と云つて居るか、經濟學者は之を區別して居る、或は其の組織の簡易により或は其の容積の大小に依り之を區別するものもあるが、最も普通なのは動力に依る分け方で、人力で動かす道具は之を器具と呼び、他の動力即電力蒸汽力等に依るものを器械と云ふのである、而して家庭工業時代に

は彼等は自ら之等の器具を所有し、小規模な製作をして居たのである、漸次此の器具が複雑な高價な嵩大な器械に征服されるに至つたのである、スコット、ニアリング教授は其の著書「貧と富」の冒頭に此の現象を研究し、而も器具と器械を巧妙に區別して居られる、(1)器具は之を使用する人が自分で製作する場合が多いが、器械の使用は到底自分で器械を製作することは出来ない、(2)器具の使用は之を所有してゐるのが原則であるが、器械の使用は労働者であつて之が持主は資本家である、(3)換言すれば資本家は單に資本を投じて器械を所有して居る故を以て莫大な利益を得て居る、反之直接器械を使用する労働者は唯自己の勞力を賣物にして賃銀を得て居るのである』と、此れが現代の大問題たる労働問題の發生する根源である、私は之等の論點並びに中・下級社會の生活問題等に就ても

研究したこともあるが、それらは此所には省くであらう。

五

さて此の器械工業の特色とする所は、前にも述べた様に、第一に大量生産と云ふことを前提としてゐる、少しばかりの品物を製作するには家庭工業で差支ない第二に莫大な資本と多大な勞力を要すると云ふことである、これが現代の工業が資本主義なりと云はれてゐる所以である、最後に器械工業は其の營業規模の大きなことを條件とするのである。

以上述べたる理由からして、工業の發達と共に第一に原料品即自然物を工業地まで運搬することが必要になつて來る、而して都會地工業地で製造した既成工業品を需要地に運搬することが第二に生じて來る、又前にも申し述べた様に、商

工業の發達と共に人々は次第に田園を去つて青雲の志を滿たすべく都會に集る、我東京なども人口二百四十萬を算し、中世に於ける一帝國位の人口を一都市が有して居る次第であるから、これ等都市人の食糧品の運搬さへ容易ならざる大事業である、之に加へて人の交通も益々頻繁となり、獨り必要的の運送のみならず、都會地の刺戟多き人間は時々田園の煙霞の邊に行かねばならぬし、田舎の人は又時々都會の刺戟に接しないと時代遅れになつて仕舞ふと云ふので往來する。

これ等色々の原因から、貨客の運送は實に近代の一大事業であり、換言すれば今の時代は經濟が交易を主とするが如く、社會現象も交通を中心として居ると申して差支ない。

高遠なる學理は姑く措くとするも、今日に於て一日全國の交通機關を運轉しな

かつたならばどうであらうか、否其んなことは人間の血管の運動を一分休めると云ふこと、同様で、想像さへも出来ぬことである、交通なき社會は死んだ社會である。

而して前にも一寸述べた様に、工業の發達が人口の都會集中を來たした結果、都會人士の食糧品の運送さへ既に非常な事業で、先きの歐洲大亂に於て、歐洲の大都市が交通機關を軍隊輸送に専用された結果として其の食糧品の補給難に遭つたことは諸君の記憶に新たなる所であらうと思ふ、最近の物價の騰貴が主產品の不足、正貨の増加にあることは勿論であるが、滞貨問題が物價に影響したことも既に諸君の熟知せらるゝ所である、尙倉庫の研究及び倉庫と鐵道の關係なども面白い題目であるが、あまり専門的になるから此所では省いて置きますが、唯最後に、

大亂の最中、米國の經濟學者ホー氏は「獨逸の潛航艇が英國を封鎖したるが如く米國の鐵道は米國を封鎖したり」と述べてゐる、以て當時米國に於ける滞貨問題の状態を知るべく、又鐵道事業の如何に社會に重要なるかを知ることが出来るでありません。

## 中、下級社會の生活問題

### 一 追越される貧乏

昔から「稼ぐに追ひ付く貧乏なし」とか「朝起には三文の徳あり」とかその外、貯金の奨励節約のすゝめなどに關する格言や標語は數へ切れぬ程あるが、併しながら今日のやうな經濟の仕組になると、なか／＼稼せがうと思つても其の方法がつかず、朝早く起たところで却つて腹がすくばかりで三文の徳にもならぬことがありはしまいか、要するに貧乏の方が速力が早いので追ひつかれ勝ちになつて來た、諸物價は戰爭が終へてもまだなか／＼天井知らずに昂騰してゆく、家族が少し多く稼ぎ人が少ない家庭などでは今日の生活はなか／＼骨が折れる、「米代だけ

でもうつかりすると月に二十圓位はかゝる」といふ嘆聲がしば／＼諸方面から聞えて來る、私は眞に生活問題に就て凡ての階級の人々が自省し研究し、總立ちになつて解決を計るべきであると思ふ。

### 二 生活費の最少限度を定めよ

よく人は個人の經濟は「入るを計つて出づるを制するにある」と云つて居る、なるほど一定の收入しかない者は倒さになつたとて其れ以上出所がないから、それによつて自己の生活標準を決定してゆかねばならぬことは勿論であるが、それは給料又は賃金といふものが個人の社會に於ける生計といふものを標準として與へられる場合に於てのみ云はれるのであつて今日の如く世界各國何づれの國にありても賃金なるものが個人のその社會に於ける相當の生活といふものを標準とし

て與へられて居ない場合に於ては、自然自己の生活の最少限度を自分で計算し、其れに足るだけの収入を得られない場合には、内職を求むるなり、他の家族をして働かしむるなり、何づれにしても適當な自衛方法を探るより外に方法がないのである。此の意味に於て、私は従來男子が稼ぎ人であつたが爲めに家長として、かなり適當な權力を有つてゐた男子中心の道徳觀がぐらつて來て、日本の家庭制度も早晚改造を見なければなるまいと思つて居る、既に數多い家庭では到底一人の稼ぎ人の所得だけでは一家の生計を保つこと困難なばかりでなく家庭中のものが消費者であつてすべてをあげて家長一人の勤勞に依頼してゆくといふことは善かれ惡かれ今時到底不合理なことであるからである。

### 三 生活費の解剖

私は生活費を(1)食糧費、(2)住宅費並に燈火薪炭費、(3)衣服費、(4)自由所得に分つて之を社會の階級に比較して研究して見たいと考へる。

第一に食糧費の方から云へば、人はパンのみで生きて行れるものではない。勿論萬物の靈長として自ら任じて居る手前も精神方面に生きてゆくことが必要であるのみならず、一步すすめては文化の國民は生活といへばむしろ思想上の生活を指すのであつて生命をつないでゆくことをさゝぬことが多いのであるが、それでも、人も亦動物的存在の方面を有して居る以上、パンなくしては生きてゆかれない、其の點から見れば食糧費はもとより重大問題であつて、事實に於ても下級及中級社會では總支出に對して食糧費だけが六割か七割占めてをる、眞に手から口への生活をして居るものが多いのである、反之収入が多いものほど此の割合は

少ないのであつて、經濟上の上流の人達が食ふために支拂ふ高は總支出に對して極めて少ない。

第二に住宅費燈火並薪炭費の總支出に對する比は上流の人程其の割合の少ないこと食物費と略同じであつて労働者や下級中級の人達があの見すばらしい家に入るためにも、其の收入に比較すれば少なからぬ負擔となる譯である、總支出に對して一割から二割位までと見ればよからう。

一つ飛んで第四の自由所得といふのは生活の必要費を支出した残りのことであるが、之は所得の少ない下級の者程少なく上流にゆくにつれて豊富になることは勿論深く云ふまでもあるまい、つまり收入の少ない者程小遣錢が乏しいといふことになる。

#### 四 生活の調節辨

さて第三に立ち戻つて考へて見ると、衣服費だけはたしかに上流の人々の方が重い負擔をして居る。労働者は下級階級のもの程衣服費に投ずる所が少ない。これはむしろ衣服の必要が少ないといふのでなくして食糧費とか住宅費とかいふ生活上極めて必要の度が痛切であつて之を缺けば直ちに健康に影響し、能率を低下せしめるやうな方面に重い負擔をして居て衣服までとても手が及びかねるといふ風に見るのが穩當であると思ふ。此の意味で私は衣服費を生活の調節辨であると言ひたい、然るに此所に見のがしてはならぬのは中流者にあつては、この衣服費を下級者ほど節約し得ざるのみならず、形式だけでも上流の人達と同じ位のもの揃へておかなければ交際すら出来ないといふ所から、衣服費がひどく中流階級

を壓迫してをることである。殊に我國では外國などでは夢にも見られない二重生活をして居る關係から、中流者は、洋服も和服も四季に通じて禮服と平常服とに區別して、形だけでも有つて居なければならず、いよ／＼中流の衣服費を膨脹せしめることになる、私はそれ故に衣服費は中流者に取つて呪であるといつてをる。

五 合理的生活の提唱

生活費が膨脹して困る困るといひながらまだ／＼我々は非合理的な習慣的な生活をして居ることが多い、下級者は自己並に自己の家族の健康と清福を標的として無益な贈答や、非衛生的な間食や、虚榮的な冗費を節約して生きてゆかねばならぬから、比較的緊張して居るやうにも見受けられるが、其の上にも如何にして生活すべきかを深く考へる場合であると思ふ。

所謂有識の中流者に向つては私は非合理的の支出の節約を高唱したいと思ふ。例へば百圓内外の月俸しか受けて居ない者が高等官だと云つて一夕の宴會に十圓以上も支出し居るその無自覺には呆れざるを得ない、私は決して道學者のやうにすべて灰色の生活を強ゆるものではないが、屁の様な談話を交はし、賤業婦の御相手をするのが高々、何等思想上の所得のない會合の爲めに貴重な自由所得の過半を失ひつゝある我中流者にせめて其の半分でも丸善か中西屋へ支拂ふやうに

ゝめたいと思ふのである。

私の婦人觀



## 婦人生活の社會化

ついで先頃のことであつた、丸の内、海上ビルディングの中央亭に開かれた處女會に於て、婦人の職業問題がはしなくも宮田脩氏と文部省の下村參事官の間に論争せらるゝに至つたといふ。私は勿論其會合の席に居合はさなかつたから詳細の事情は知るよしもないが、宮田氏が婦人教育界の先覺として人格主義に依る校風を天下に示してをられることは私が嘔々するまでもないことで同時に氏が經濟上、社會上の見地から一部の婦人が出で、職業に就くといふことは止むを得ざる状態なるのみならず進んで自覺した婦人が社會的奉仕に従事することはむしろ婦人の

進歩、社會の慶祝であるといふ私共の所見と略々一致の見解を有してをらるゝことは其の屢々發表せられた論文に依つても窺ふことが出来る。然るに此所にまた下村參事官は「婦人が社會的の仕事に従事するといふことは、明かに我國體に反してをる。我國は既に國家自體が大きな家庭であつて、婦人は内を守り、男は外に出で、働くのが原則であつて、此の意味から婦人の職業は排斥せねばならぬ」といふ意味の主張を述べられたといふ。

二

元來我國では官職にあるものは内外の事情から、自己の意見を公表する機會が尠いから、下村參事官の婦人教育觀とか婦人職業觀なども纏つたものとして新聞でも雑誌でも著書でも拜見することが出来ないのは残念である。そして新聞紙上

に掲載された断片的のもので批判を下すのは甚だ禮を缺いた措置かも知れないが同參事官が家庭を中心と觀て、此の見地から婦人の職業を否定せられることだけはたしかである。而して此の點に就てすら私は同氏の意見に承服することは出来ないのである。眞正の意味に於ける家庭は勿論吾人生活の安宅で所謂「一つの祭壇」神秘幽嚴の殿堂であらねばならぬ。經濟學者も家庭には三種の意義があるとして(1)生活的團結(2)居住的團結(3)教育的團結の三をあげてをる。乍併現在の我國の家庭そのものは既にあらゆる點に於て改良せらるべき餘地を有してをるのみならず、やはり其の中核が個人である以上個人を單位とし個人を中心として家庭も社會も觀察せらるべきものなること云ふまでもないのである。今や世界は改造途上にある、時勢に順應せざる日本の家庭がある程度まで改良せらるべきは勿論

であらう。假りに家庭にして改良の餘地なしとするも或る一部の婦人が出で、社會に働くことが何の支障を生ずるであらうか。

從來婦人が家庭内に於てなしつゝあつたことは凡て男子中心の道德觀から割り出され、男子に都合よく出来てをる道德に依つて支配されて來たことを氣付かなくしてはならぬ。私をして云はしむれば一度家庭に歸れば社會に於ける所謂敏腕家なる男も宛然たる木偶であつて一切を舉げて婦人の手數に俟つて居た「横のもの」を縦にする」ことすら男子自らは敢てしなかつたのである。それさへも「一家の稼ぎ人で外に出で、働いて來るから」といふ口實に依つて寛容されて來た。人手をかりぬ簡易生活といふことは到底家庭の男子には見られないことである。それにひきかへて家庭における婦人は料理、裁縫、洗濯、洒掃、子女の教育、近隣と

の交際等、萬端の雜務—しかも時間と勞務におかまいなしの—を處理してゆかねばならなかつたのである。其精力と勤務を思へばたしかに外に出で、働く男子以上であつて、若し婦人問題論者のいへるが如くかゝる状態を女子の男子に對する寄生生活 (Parasitism) なりとするも、甚だ割の悪い寄生であつた。而も其雜務たるや眞の雜務であつて若し社交や家庭内の仕事を、より簡單にし合理的にすれば、たしかに節約することの出来る、云はゞ文化に何等貢獻する所のない雜務にすぎぬ。

三

「私は日本の上中流のお嬢さん達が皆が皆あまりにお嫁に行きたがりすぎると思ふのです。今の若い男が高等教育を卒へるか卒はらないで、結婚して家庭の人

となりたがる退嬰姑息の氣風が然らしめるのでせうけれども大勢の教育あるお嬢さん達のうちに百人や二百人今の家庭の妻となることが自分の思想に對する多大の制肘であることに怖れを抱いて匹夫匹婦のやうに結婚を終生唯一の大事の様に扱はず、結婚に依て勞費する體力と腦力と時間とを以て自己の改造、一般同性の改造の方面に力をつくし、一團になつて少數ながら日本貴婦人の中堅として目覺しい活動を續ける人達があつてもよさ相なものだと思ひます」と與謝野晶子女史は云つてをられる。私も此の點は男女共通の弊害であると思ふ。青年男女の交際が全然解放せられざる此國に於て、無自覺の結婚を急いでをるといふことがどの位災禍を人生の上に齎すか分らないのを思ふと、私は現今の結婚制度に戰慄せざるを得ぬ。精神的な神聖な兩性の交際すら罪惡の初めであるかの如く忌むでをる

人々が一度法律上の入籍の手續さへすませば——之も當事者の意識的の行爲にはあらずして凡て外部の人々に依つて行はれる者であるが——たとひ愛なきも理解を缺けるも、世人並に當事者は何等疑ひを挾まぬのである。一體兩性の交際を解放すれば直ちに風紀が紊亂すると思ふのは大なる誤解である。「女を見て色情を起すものは心中既に姦淫したる者」であつて、人は自由の状態にあつて決してしかく放逸なものでない。人多く精神、理智の單一を説いて本能の融通性を説くが、私はむしろ本能の單一性なる議論を把持して居る。何れにしても現代の結婚の弊風を慨して、職を求め獨立獨行せんとしてゆく婦人があるとするれば、私共はその識見と其勇猛心を賞讃し同情をこそすれ、之に反對する何等の理由を見ないのである。ハッチン氏は其の著書「現代產業界に於ける婦人」に於て「若し婦人が自

己の欲する結婚と、自勞自活の生活の何れかを選択せねばならぬ場合には勿論前者を選ぶであらう。實生活に於て物の選擇は割合に簡明に行はれるものである。然るに欲せざる結婚と、正しく支拂はるゝ賃金生活を選擇する場合には何人も後者を採るに躊躇せぬであらう』と述べてをる。然るに世の所謂婦徳なるものはこの偶然とも云ふべき外部から強ひられた男女の結合、意思無きの結婚に、永久不變の貞操を、殊に一方的に女子にのみ科さむとするもので、少しく立ち入つて考へて見れば其の無法に呆れざるを得ない、かゝる道徳律を以て將來も婦人を拘束せんとするならば、私は大聲疾呼して婦人にお薦めしたい『斷じて家庭の人となる勿れ』と。

四

婦人問題の聖典とも云はれてゐる、オリブ、シユラナイー女史の『婦人と勞働』といふ著書のなかには、單に前に述べたやうな意味からばかりでなく、女子の男子に對する性的寄生々活を嘲つて、之をのがれるが爲に他の方面に進まんとする女性について『暗夜に急に今まで前進して來た馬の進路を變へたのを不思議に思つてをる騎手が夜が明け放れてからよく見ると自分等の前途には恐るべき斷崖が横はつてゐたのに氣付いて驚くと同様に、現代の婦人が從來強ひられて來た家庭の桎梏をのがれて社會に出づるのは全然この馬のやうなものである』といふ意味を書いてをる。——私共の心にも物理の力學の原則と同様に惰性が存在してをることは否認することが出來ぬ。この惰性を超越して考へれば男女共に獨立の人格者であつて、或る場合女子と雖、外に出で、働かざるを得ざること、男子

が時として家を守ることに同様である。否更に進むでは家庭に於ける生活を簡易にし女子も出で、社會的奉仕に指を染むるこそ女子の地位を向上し、人類の爲めにも祝賀すべきことであると思はれる。

私の考へる所では、婦人生活の社會化に對してはこの家庭なるものをあまりに尊重した論議の外、なほ靜神並に物質的に多くの障害が横つてをると思ふ。

或は曰く、知識の上に於て女性に到底男性の比ではなく、此の點からして婦人は家を守るべきである。然るに感情の點に於て女性の方が男性よりも優れてをることとは之を進化論的にも、現代蠻人中にも實驗することが出来る。例へば感覺、若しくは或るヒントに對する反應若しくは理解の點に於て雄は到底雌の敵ではない此の如くして男子が女子に勝るが故に出で、社會に働くといふ説は當らない。

或る者は女子は生理上社會に出で、働くに適せずといふものもある。たとへば女子にのみありて男子には認むるを得ざる menstruation などをも云ふのであらうが、社會に出で、働くといふことがすぐ激しい肉體的精神的勞務とは限らぬからこれらもさして有力な議論とは思はれない。

五

西曆一八六二年九月二十二日、アブラハム、リンカーンは來年一月一日を期して此の國の各州若しくは指定せられたる州の部分に於て奴隸として所有せられたるすべての人々は將來全然自由たるべしといふ宣言をしたのである。この奴隸の解放の宣言こそは十八世紀の末葉から廿世紀の初頭に於て吾等人類の文化運動に陸離たる光彩を放つた解放の初めであつて、眞に近代史上に特筆大書せらるべき

現象であつた。元來物理學上に於て力の惰性が存在して居る如く、自由自在なるべき我等の思想にも鐵則の如き惰性の存在することは苟くも文明批評に指を染めるもの、深く考ふべき大事實であつて、奴隸解放當時に於ては、米國の大統領は其の職能としては一人の奴隸をさへ解放する權能を有たなかつた。奴隸解放の宣言はたしかに朝野に對する挑戦であるとも見られる。之を今日の我等の理解を以てすれば戰慄すべき奴隸制度でさへ因襲の久しき、何等疑義を挾む餘地すらなかつたのである、其の惰性も現實上に於ける企業家の反對もすべて之を却けて人類共同の福祉と利益の爲め自由平等四海兄弟の旗幟を標榜し、あらゆる障礙も激碎して此所に全米の奴隸解放を斷行した其の理想と實力に至つてはさすがに驚嘆敬服の外はない。リンカーン彼れは不世出の傑人であつた。

若し頭腦の優劣、知識の高下、經濟力の有無といふ點から論ずれば白人と黒人とを同一に見るとは眞に白日夢の囈語であらう。それを高い尊い人道の上から見ると一切の差別を撤し、堂々たる平等の人格者と見た理想に無限の味がある。婦人生活を勝手臺所から解放して社會に出すといふことも畢竟この理想の實現である。先づ人としての尊貴を自覺體得し、この自覺の上に立つて男女異なる所なき平等の人格者たる認識が兩性に確立され、そこに始めて婦人生活の解放がある。その爲めには婦人の智識教育も必要であり、職業教育も必要である。乍併やはり思想の獨立、信念の獨立が先決であつて、經濟獨立や選舉權の獲得などは其の手段であり、或る場合その附帶問題である。

## 職業婦人の諸問題

一

從來家庭を中心として働いて居た婦人が出で、職業に就くといふことは疑もなく現代の新しい問題であります。而して此職業婦人と云ふことに付ては唯物數奇な人が架空な議論をして居るのであると至極平氣な論者もありますが此の職業婦人の増加といふ現象は其の根柢に色々面白い原因が伏在して居るので決してかく好奇的の現象として見逃すことは出来ない様に思はれます。私は主として之を社會政策的見地から經濟的に研究して見度いと思ひます。尤も私が最近手にした著書のうちでも此等の問題を或は進化論的立脚地や道德的見解から色々細かい

新研究を積むだのもありますがそれ等に付ては他日稿を改めて述べることに致します。

二

Hutchins の云ふ英國人は一昨年 Women in the modern Industry の云ふ著書に於て英國に於ける婦人が如何に多數工場其の他の場所働いて居るかと云ふことを公に致しましたが十八世紀から廿世紀にかけて文明國の産業の上に顯著な變化があつて其れがために延いて職業婦人が多くなつたと云ふ見解を述べて居ます、即ち産業革命があらゆる文明國に生じて從來家庭内で内職的にも行はれた手工業が廢れて大規模な工場で多數の男女工を使備して行はれる大資本的工業が漸次勝利を得て參つたと同時に其工場内の仕事が分業の組織になつて來ましたから



一人一人の職工のする仕事は至つて簡単な部分的のものとなりました、換言すれば一方に於ては人手を澤山要する事業が勃興して來たと同時に他方に於て其の仕事たるさして經驗のない女や子供でも出來ると云ふ事になりました。之に加ふるに近時諸物價は暴騰して生活費が嵩むと共に一家の一人の「稼ぎ人」が働いて得る所のもの位では全家族を支ふるに充分な収入と申すことが餘程六しくなりました。斯かる内外の情勢に誘はれてどうしても女子供と雖何か職を求めて外へ出で、働かなければならぬと云ふ次第になつて來ました、所が又最近各國で工場法などが出來た爲めに子供が工場へ出て働くことが禁止されたので一時に婦人の職工が多く入用になつて參つたのであります。

三

これは概括的に婦人が工場其他に出で、働く様になつた次第を叙述したのであります。Hutchins の云ふ所に依れば婦人が外へ出で、働くのに三種類あると云ふのです、第一は未だ製造されて居ない即原料品を運搬する様な極めて力業に従事するものである、これは日本にも非常に多くあります。地方に依ると船舶へ石炭を搭載する女が働いて居るのが澤山あります。此等は其の仕事の性質として賃金も低いし地位も勿論高くないのであります故に其の健康状態などは餘程注意すべきものであります、第二は工場或は家庭に於て事實器具器械を取扱ふ作業をなすものであります此は其の數に於て甚だ多數であります我國の如きは工業が多く繊維工業でありますから其の仕事は自ら女子に向いて居るので職工中の約六割は女工で其の數實に七十萬と云はれて居ます。換言すれば日本の工場工業は過半

可憐なる女子に依りて營まれて居ると云ふことが出來ます。工場の内でも比較的  
 大きい工場になると概して手當もよく設備も比較的完全に慰安會や娛樂會の催  
 もあり、其の地位は悪いとは云へませんがそれでも不衛生なところが多い、況して  
 小さい工場になると未だ女工虐待も行はれて居る相です、其の収入は往々男子の  
 職工を凌駕し比較的有福な生活をして居るものもありますが多數の女工が一所に  
 集まつて居る結果どうも精神上面白からざる影響を與へる事が多いのです、第三  
 は既に出來上つた品物を販賣するに多數の女子が働く様になりました女賣子、女  
 給、などは此の部類に入れることが出來ます。之等は其の収入必ずしも前二者よ  
 りも多いと云ふのでありませんが其の地位として其の服装や生活状態は比較的良  
 いのであります。此の階級は社會に職業の種類が増加するにつれて殖えて參る様

であります。何れにしても以上の諸種の事業に女が働く様になつた結果東京あた  
 りでも女中拂底の聲を聞く様になりました位です。

四

何故に女が外に出で、働く様になつたかど云ふことは既に大體述べましたが、  
 尙工業労働者其他のものとして女子が一般に歡迎される理由は、其の性質が従順  
 であり、男子の如く職業を求めて次から次ぎへと榮達を追ふと云ふ事が少ないの  
 と、更に賃金が低廉であると云ふことにあります。女子が働くのには家計の不足  
 を補ふと云ふことが多いのでありますから、大概の場合に於て多額の賃金を要し  
 ないと云ふのですが、之を反對に又女子が働かねばならぬ程一家が窮迫して來る  
 と労働條件や勞銀のことなどは殆ど考へる暇がなく、唯職業にあり付けば結構で

あると云ふのでこれが女の職業者の勞働條件や賃金を非常に割の悪い現狀に置くに至つた原因であると云はれて居ます。其れと同時に從來多くの女子が無教育であつた爲めに正當なる自己の權利を主張することも敢てしなかつた事も亦、其の原因の一である。Hutchins は云つて居ます。而しながら女子は賃金は低いが一朝自己の身體を賣ることに依りて多大の收入を得ると云ふことは無教育の女でも知つて居ます。此が女子の賃率の低いことと因果の關係を有して居ます。Swanwickは此の弊風を慨嘆し女子が自己の大使命を卑むべき金品と換ふることをProstitutionであると云つて居ります。

五

歐洲の文明國では我國と異つて全人口中女子の數が男子の數よりも多い所があ

ります。如斯國では女子が家庭の人となりたくも事實上なれぬ譯で、英國などに職業婦人の多いのは此の原因からのものも少なくないのです。乍併我國などでは未だ如斯現象は起らぬのであるから、職業婦人は大部分經濟上の事情からである云へます。英國の如き國でさへ如何に女子が家庭を中心として活動して居るか云ふことは、家庭内の工業（洗濯業等を含む）に従事して居る者が全職業婦人中の三割六分で機械裁縫工場に屬する者が各一割五分強である云ふことで分ります。婦人が出で、働く云ふことは善かれ悪かれ以上の諸原因からして時代の大勢であります。果して然りとすれば此所に三個の問題が伏在して居ります。其の二が職業婦人と家政の問題で其の二が職業婦人と品性の問題で而して第三が職業婦人と健康問題であります。乍併唯今此所では唯第三の點に就ただけ簡單

に論じて他の問題は又他日書く事にいたしませう、女子が體力の點に於て男子よりも劣つて居ることは何人も疑ひを容れぬ所でありませう、其の女子にして身體を過度に働かしむれば保健上決して善良な結果を望み得る譯がありません。各文明國で殊に女工問題が重きをなして居る所以であります。文明國中日本程青年の死亡率の多い國はなく、殊に日本程女子の死亡率の高い國はない相です。然も其の妙齡の女子の中に肺結核で殞れる者が多いと云ふのでは思はず悚然とせずには居られません。此の如きは其の生活状態が著しく不良なるが爲であつて、これは獨り國家的施設のみに依らず、民間でも十分社會政策的施設を備へなければならぬことと思ひます。

## 兩性問題

—

最近内閣統計局から出版された大正二年の吾國人口動態統計を見ると、同年の我國の出生中、體性に依る生産率が掲げてある。今其の要點だけを紹介して見ると本籍地に於ける男の生産數九十九萬八千四百七十七人、女の生産數八十六萬九千六百八十九人であつて、女百に對する男一〇四・五である。更にこれを人口五萬以上の市區合計に就て見ると、女百に對して男、一〇四・六、五萬以下の都會では、女百に對して男、一〇五・三に當る、斯如男女の出生率が既に異つて居るからして現在人口中の兩性の數は場所に依つて必ずしも大差ないとは云へぬ。概括的

に論ずれば文明國は男子よりも女子の現在數が多い、歐洲諸國では戦争前に於て女子の數が多かつたから戦争に因る壯丁の死亡に依つて戦後は此の傾向が愈々擴大されるであらう、我國などはまた男の方が女よりも多い國の一つである、如斯現象が各府縣にも存在することは勿論であつて、彼の「一夫一婦の制度は男女の數が同數であるから」と云ふことは數字上に於いて正鵠に立證は出来ないが略其傾向を示して居ることだけは察せられる、さればある論者は又一夫一婦は神の意志なりと論じたけれども單に神意に歸すると云ふは合理的な結論とし難からう、乍併私の考へではむしろ一夫一婦の根擧は之を數字よりも人の本能に求めたいと思ふ、此の意味に於て神意に依ると見る方がよいかも知れぬ。

根抵に於て男女共等しく一個の人格者であるからして男子が自ら欲する所は之

を女子のためにも保留すべきであるとの觀念からして、男子が女子に貞操なることを要求すれば、勢ひ自己も節操を二三にしないと思ふ道義心が即ち一夫一婦の要素であらう。

二

男女は根抵に於て同様なる人格者であると思つた、併し乍ら此の斷定は斯く無條件に輕々しく認めらるべきであらうが、少くとも現在に於ては事實然らざる事が多くはないか、事實上男子が稼いで生活資料を得て一家を養ひ家族は之に依つて生活してゆく、其の他のあらゆる點に於て習慣上男子が強者であることは争ひを容れぬ所である。公娼制度の如きも制度其者の可否を論ずる前にかゝる制度を存在せしむる男子の無節制を、女子が課せられて居る婦徳に比較して論ずるもの

は少い。かくして女子は男子の附屬物の如く思はれてをる。加ふるに日本では在來の慣習が結婚問題の如き人の一生の大方針を定むる時に於ても女子は發言選擇の權利も與へられないし、又其の機會も有たなかつたからして、いよく女子の社會上並に家庭内に於ける地位が低下して來た傾向がある、輓近個性の自覺と云ふことが諸方面に於て叫ばるゝに至つて我國に於ても兩性問題が經濟上及び倫理問題となつて來たことはもとより其の所である。

統計上に於て吾國が世界でも有數な離婚の多い國であることも、それは勿論種々な原因もあらうか、女子の年齢の若き際の輕卒な婚姻をなして居ることが少くない。而して夫が妻の家を去る離婚よりも、妻が夫の家を去る離婚の方が多く、なほ離婚者の同棲期間は短期間のものが多い。大正二年の離婚總數は五萬九千八

百三十件であるが、就中大正二年に結婚したものが其の八、三四パーセント、其前年度の明治四十五年、大正元年に結婚したものを加ふる時は實に、二割六分強で離婚者總數の四分の一に相當して居る、然るに此れを都會と田舎に依つて觀察して見ると、人口五萬以上の都會に於ては大正二年度に結婚したもので同年中に破鏡の境遇となつたものは其の四パーセント強、前年度のものは一割九分で總數の五分の一に達しない、又此の比例を前年度の夫と比較すると、何れも本年度の方が低い。

如斯く同棲期間短くして離婚するもの、數が都會に少くして田舎に多き所以は果して何であらう、由來人情敦厚なるは田舎の特性であること、矛盾はせぬか、惟ふに如斯者は都會の方が自覺して居るから經卒な結婚のない事が重大な

原因の一に居りはせぬか、尙都會と田舎とは所帯に異なるものがあるし、又都會には内縁の妻が多く婚姻者は婚姻届を提出せずして経過するものゝ多い事も注意せねばなるまい。

最後に短期間同棲の婚姻者は如何なる原因に依つて多少があるか、是於早婚者の多少との關係を観察すれば、即婚姻總數に對する早婚者の比例と同棲一年未滿の離婚者の離婚數に對する比例とを對照するに、兩者の間に相聯の關係がある、而して其の相聯なる關係は妻に於て強く夫の場合に於て弱い。

三

これを歴史的に又進化論的見地から研究してみると、女性は必らずしも男性よりも劣等なものでなかつた事は實證がある。

例せば人間より劣等な哺乳動物などで見ても男性よりも女性が適に鋭敏な理智と感覺とを具備して居るものが多い、雄にはなかく分らない事も雌は直覺的に感付くと云ふ風が少くない、唯雄は雌の歡心を求め自己の競争者を打殞さむがために腕力や體力を有すると云ふのが一般である。如斯現象は兩性が分れて其の間に淘汰が行はれ、分業が行はるゝに至つて生じた事で、男性の偉大な體軀と腕力とは其の勇氣、競争心、忍耐力など、共に其の敵を殞す事の爲めに重大な價値があるが、此等は決して男性の優越を證するには足らぬ、女性は常に男性を選択するの權を保留して居た、男性が外にあつて活動し勢力を得るに至つた事は、本に歸つて女性の意志から出たものであるとも云へる、河の下流は上流より高きを得ないと同様に、むしろ女性の意志に出た男性の優越は決して眞に優等なる

所以でない。

しかるに一方に於て男性には實に我儘な利己的な所があるが、女性は本來犠牲  
 献身を主として居る、種族の維持といふことに就ても女性は實にいふべからざる  
 犠牲を拂つて居た。男子は社會的に活動するから死亡率などは男子に多かるべき  
 は想像が付くが尙爰に見逃ことこの出來ない現象がある、多くの邦に於ては女の死  
 亡率が少しく男の死亡率より多いが青年壯年になると殆んど凡ての男の率が高く  
 女の率が低いのに本邦に於ては之と反對で男の死亡率低く女の死亡率が高い、是  
 れは男の死亡率が低い爲めであるか抑も亦女の死亡率が高い爲めであるか外國の  
 統計と比較すると、一體青年壯年の死亡率は我國のが最も高い相だ、十五歳以上  
 廿歳までの者の如きは世界各國中我國より高いものはないと云ふ、殊に女子の死

亡率は各國に超越して居る。然らば即ち女子の率が男子の率を超越して居るのは  
 眞に其率が高い故である。而して其の原因如何と云ふに、一言にして云へば女が  
 男よりも孱弱なるが爲めであつて、其の孱弱なるは其の生活状態が好くないから  
 である。

一體日本では個人主義といふ言葉を誤り傳へて居る、故に其の文字にいふべか  
 らざる悪音が附着して居るから私は敢て避けて個性と云ふ文字を用ゐて置く。若  
 し人の個性を尊重して論ずれば両性全く同等であつて其の間に何等差等はなかる  
 べき筈である、男子の社會的活動と、女子の種族維持のための犠牲と、其の間に  
 何等差等上下はない、否性なるものに固執せずしてひとしく「人」たる事に着眼  
 すれば議論の餘地すらない、歴史上に於て母權中心の時代もあつた、父權萬能の



時代もあつた、しかし何れも偏して居る、女性の自覺と、其の地位の改善とは實に社會の重大問題である。

### 家庭に於ける婦人の地位

#### 肉慾の對象とされた婦人觀

男が如何に婦人を選するかに就ては、英國のある婦人問題の論者は三つの階段を擧げて居る。第一は單に肉慾の對象とのみ觀るものであり、第二は只管愛撫の目的物とのみ見るものであり、而して第三者は自由獨立なる人格者として見るものである。此の三つの階段は之れを沿革的に過去の婦人の地位と現在の婦人の地位と、將來の婦人の地位を示すものであるとも云へるし、之れを現代に於て見れば進んだ家庭、中級な家庭、最も進まざる家庭の婦人の地位を示すものであると云へる。

沿革的に觀れば昔は概して女は單に肉慾の對象とのみ觀察されて居た。之れを露骨に云ふことを憚り且つ血統保存と云ふことをあまり重大視した結果として、女子七去の制度などが行はれて居た。婚姻した女子であつても若し子なき時は去ると云ふことが多少の例外はあるとしても、理窟なしに認められて居た。今から考へて見れば之れはあまり原始的な思想である、子孫の保存と云ふことは重要な事であるに相違ないが、其の目的が達せられないがために其の妻を去ると云ふのは、男子が自己を中心とした勝手な論法である。根本に於て女子はこんな待遇を受けて居たからして、其の末に於て女子があらゆる點に於て虐待されて居たのは論を俟たぬ。子を生み子を育て、料理裁縫掃洒附近の交際其の他男子の氣色を損せざる様あらゆる仕事を諾々として行はしめられ、其れに堪えたものが賢婦であ

る、良妻であるとして居た。夫唱婦和も盲動的であると云つて差支なかつた。併しながら今ではこんな思想は大部分なくなつたと申してよい女は弱者である三界に家なきものである、故に養つてやるべきもの、憐むでやるべきものであると云ふ思想が近來立派な衣裳の外觀を粧つて流行して來た。私をして曰はしむれば、今の教育家でも先づ此の處に着眼して居る人は上乘な方である。まだ女は男の附屬物であるかの様な思想でやつて居る。随分高等女學校などの數もあるが、大概は第二の國民の女たるべき立派な婦徳を具備した婦人を養成すると云ふ具合な、極めて概括的な主義しか有して居らぬ。而して其の謂ふ所の婦徳なるものを聞いて見ると、前述の第一と第二の思想を少しばかり飾り立て、述べるにすぎな

女の奢侈は男の思想の反映

い。少し極端に云へば、家庭に於ける女の地位は娼婦と下女の相の子位である、これから少し立ち優つた所が、憐憫の情を加へて女を取扱ふと云ふ階段である。けれども一概に弱きが故に憐むとか、男が働いて女を養ふのだとか云ふ思想は、唯だ第一階段に多少の着色をしたのにすぎぬ。やはり根本的に誤つて居る。

一方に於て教育家などが、華美なる勿れ、奢侈なる勿れと教へても、滔々たる社會の多數者が女子に對してこんな思想で居るから、兩極端は決して一致しない、教育家の云ふ所は机上の空論たるに止り、實社會に勢力ある人々は先づ以て其の子女に美服を與へ飾り立て、悦んで居る、女が華奢になるのは男子の思想の反映である。愛と云ふことは其の對手の人格全部を自分の思想感情趣味で覆ふことを意味するものであつて、決して其の獨立的存在を認めないと云ふのが第二の階段

である。若し、女子を單に肉慾の對象とみ見た第一の階段から第二の階級を見る、餘程違つた所もあるであらう。明治の晩年から大正にかけての家庭小説などを見ると多くは新夫婦の親しいのに對する姑舅の反感を表はしたものでなければ、男子が女子を美はしき玩弄物としたもの乃至は自覺のない女子一代記であること云つてよい。

良子女は權力ある母の下に

けれども唯だ愛撫憐憫の情を以て見られ、徒らに美服や化粧品をあてがはれて居る日本の女の多くは何時かは人格的に自覺せねばならぬと思ふ。よく人が日本開闢以來の大事として明治維新を擧げるが、明治維新の大事業たるは國體を宣明し、國民の自覺に依つて君臣の中間を塞いで居た幕府を倒した所にある。然し、

吾國民は國民的には自覺したが個人としての自覺はない。否極めて薄弱である。若し大正に維新があるとすれば國民の個人的自覺であり、進むで女子の人格的覺醒であらねばならぬ。

惟ふに思想の變遷とか民族の覺醒とか云ふものは一朝一夕では出来るものではない。一のヂエテレーションに依るものである。私共が根柢に於て有して居る女子を憐憫愛撫する思想は前代の人々には了解が出来ないと同時に、男子と女子が同一の人格的獨立の思想の上に立つて堂々と對峙すると云ふことは現代の人には了解が出来ぬ所であらう。けれども其所までゆかなければたしかにうそである。此の意味がどうも徹底せぬので實際の問題としては色々な慘しい事が起つたり、理論の問題としては通せぬ所が出来るのである。私の知つて居る限りでは

立派な子供は家庭に於て母親が相當な勢力を有して居る家から生ずる様だ。何故日本では貴族や富豪の子供が出来が悪いとか云へば、彼等の父親なるものは維新當時漠然と偉くなつたものが多い。父親が偉いと云ふので社會に於ても家庭に於ても擴充り切つて居て、其の他の母や、子女の手を伸ばす餘地すらない。要するに母親や子女の人格的存在がない。夫だから偉い人の二代目は慨して暗愚と云ふことに決まつて居る。

併しながら之れに反して母親が相當權力ある家庭は必ず子女も尊重さるゝ家庭である、社會的には偉い父親も家庭では母親に一步譲ると云ふ家では必ず子女が立派な人物である事が多い。所が日本では兎角變人奇物を尊重する傾向があつて圓滿な、洗練された紳士などを一概に俗物扱ひにする。それだから偉い人程女子

の勢力などは認めない、蟲けらの様に心得て居る。『居常粗服を纏ひ』など、云ふことは偉人の一要素の如く心得て居る人があるが、これも極端までやると、女子の心附けなどは全然無用となるではないか。

男ばかりが偉くては駄目だ

私は世間で褒められて居る粗服家の偉人などを見る時に必ず其の家庭の子女のために一擲の涙を禁じ得ない。これ等は男子さへ偉ければ女子はごうでもよいと云ふ論から出来上つた結果ではないか。韓非子には或る宰相が正式の六頭立の馬車に乗らない事を褒めた人があつた所が、他の一人が之れを駁した事が書いてある。男子の服装などは家庭の女子をして計らしむべきではなからうか。前提は女子の人格が獨立であると云ふに出發して男子も或る部分は女子に譲る

べしと云ふが結論である。男子が自己の空名を得んがため又は徒らなる小主義のために家庭の女子を人格的に殺すのは非である。

然るに今では一方に於て男子の慾望のために女子を華美ならしむる階級がある。と共に他方には男子が小さな主義を把持したいばかりに家庭の女子の注意などは顧みないと云ふ階級があるやうだ、共に女子に人格を認めないから起る弊害である。

一體が個人的自覺とか、人覺的存在とか云ふことは日本人に取つては餘程困難な事である。元來家の作り方からして獨自の存在、獨立の工夫をする様には出来て居らぬ。親は自分の思想を其の儘子供に移植せんとして居るし、父權は事實上母權の存在の餘地なからしめて居る國で、女子が思想上男子と同一の階級者とな

ると云ふ事は不可能とも云へる。併しながら日本の様な純白な君主國でも立派に議會を設けて立憲政治がやつてゆけると云ふ見當が立つならば、從來人格者として取扱はれなかつた女子も亦た家庭内に於て立派な人格者として自分の事は自分でやつてゆくと云ふことは決して家族制度を破壊するものではないと思ふ。

愚かしき新婦人の裁判沙汰

然るに明治維新を無上の光榮と心得て居る人達のなかにも、家庭内に於ける此の維新は危険思想であると思ふ人が多いは如何なる譯であるか、名に依つて恐れてはだめだ。

私は此の論を主張して、世の教育家、殊に女流教育家諸彦の猛省を促したい。男女、其の社會上の活動方面は異つて居るが、人格的價値は決して差等がない、

婦徳と云へば直ちに従順とか、貞淑とか、謙遜とか云ふがこんな事は男子にも必要な徳であつて、女子にのみ強制すべきでない。現代の人は或は其のあまりに突飛なるを以て攻撃するかも知れないが、其れは盲目的な習慣に囚はれて居るからであつて、來るべきジェネレーションの人には至極平凡な論であると思はれるであらう。そして若し此の點に着眼することがなければいくら、女子教育機關が形ばかり澤山出來ても要するに其れは高等下女の養成にすぎぬ。

各國の法制を見ると、概して妻は無能力者となつて居る、法律行爲をするには夫の同意を受けることが必要であつて、夫の同意なき妻の行爲は夫、或は妻自身に依つて取消し得べきものになつて居る。民法の學者は之れを以て家庭生活を統一圓滿ならしむる規定であると説明して居るが、昔は夫婦財産制などがなかつた

爲めに妻の財産は結婚に依つて當然夫の所有物となつて居たが、今では妻にも所有權が認められて來た。然らば現行の法律で妻を無能力者であると規定して居ることが即ち永久の眞理であるとは出來ぬ假りに一步譲つて法制上妻はさうしても無能力者にして置かなければならぬとした所が、實生活の家庭生活に於ける男女同權に何の支障となるであらうか。輓近男女の問題を裁判沙汰にして特意になつて居る連中が少くないがその愚や及ぶべからずと思ふ。苟も婦人問題にでも頭を入れる人ならば自己の自由獨立な見解に依つて之れを解釋し、堂々として其の論に従つて行動すべきである。然るに却つて婦人問題などに對して何等感興のない法廷沙汰にするなど云ふのは自家撞着である。併しながら私の見た所では今の婦人問題論者が如何に偉ら相な事を云つたともやはり中心に於ては婦人に對

して第二階級の思想しか有して居らぬのだから、所論と實行とが左様に矛盾するものも當然の歸結と申さねばならぬ。但し終りに一言斷つて置くが以上は家庭内に於ける婦人の地位を論じたのであつて、社會上に於ける地位に當然推論さるべきでない。之れに就いては更に稿を改めて書く事にしやう。

## 結婚の弊風と青年男女の交際

### 兩性發生に對する一比喩

昔希臘のアリストファネスは兩性の事を巧みに吡喩にして説いて居る曰く、初め人間は兩性を具備した圓柱形のもので凄じい勢力を有して居た、其の勢力に乗じてツライスの征服を企てた爲めに遂に其の激怒に遭つて體を兩斷せられたのを憐む神があつて、其の切つた跡を縫ひ、顔や其他のものを其の縫ひ目の方に向けてやつた。其れからと云ふものは一片は他の一片を求めて歩いて居るのである。兩性は果してもど／＼一體であつたかどうか、私には判断がつかぬが、今でも夫婦は一體と見て居るおそらく昔も左様な見方からして、如上の物語りも出來た

ものど信ずる。

深い穿鑿は之れを他日に譲るとして、要するに兩性が相一致してはじめて完全な人類となること云ふ事は疑ふべくもない事である。しかるに現今の結婚は果してどうであるかと云ふと、其れは色々な原因もあらうが、随分其の本來の主旨とは異つた方法や思想で行はれて居る。

### 因習に捉れた不徹底な議論

斯く云つたらとして誤解されては困る、私も理想と現實、理論と實際は左様に綿密な所まで一致してゆくのではないと云ふことは勿論承知して居る。靜止して居る物體に一定の力を加ふれば、其の物の加へられたる力の方面に向つて動いて止まぬといふのが物理の原則だ相だが、種々の外界の抵抗のために、現實には一つ



も其のまゝ表はれては居らぬ。併しながら眞理は依然眞理たるを失はぬのである。人事のことにはもとより一層斯くの如き矛盾は多い筈である。けれども私は人の作つた習慣など、云ふものに對しても、相當な疑問を挾むで、之れを正しく理解し又たは矯正するやうな見識はなければなるまいと思ふ結婚問題の如き、云はゞ因襲既に風をなして居るのに加へて、此れは嚴肅なる公序良俗の問題であるがために、先輩諸公などは實に不徹底な糊塗主義を採つて居る。教育家などでも、殊に女子教育家などは、勉めて根本問題から避けて、枝葉の議論を戦はして、やゝともすると『怒るな働け』とか『女らしく』とか實に女子教育の根本から見れば下らない所を兎や角云つて居る。

結婚上悲劇を生ずる根本は

併しながら少しく世のなかの實際に着眼すれば、此の結婚問題に對する懷疑と、家庭制度に對する將來の改善と、女子の人格的養成とがあらゆる點に於て重大な案件となつて居ることが分る。日本現在の思想は、實に混沌として居る。生つかぢりの個人主義と、昔ながらの國家主義とが相戦つて居る。一方に未だ女子の七去などを頭からは認して居る階級もあれば、無暗な自由を振り廻して居る連中も居る。六七十代の人には三四十代の人思想は全くわからないし、三四十代の人思想は十七八廿代の人思想に全然分らないと云つてもよい程の思想の懸隔がある。結婚から生ずる種々の悲劇などは全く、此の思想界紛亂の反映であると斷言して差支ないと思ふ。

疑はしき或種婦人の節操觀

一體人生といふものに對して、深刻な考へを持たぬのは、日本人の特徴である。まで云はれて居る。結婚などは唯だ偶然なる合せ物だと觀念して居る人が少くない。一歩進んで生活の保障、表面の安樂位が關の山である。年頃になると、親も本人も片付くべきものと決めて居る。偶々好い媒介者があれば忽ち其の口に乗る。若し相手が、財産か、學位か、官位か、社會的地位かでもあらうものなら一も二もない。抑も其の人が如何なる性質を有し、如何なる情操を有し、如何なる主義を抱いて居るか、などと云ふ事は決して徹底的には研究して見ない。滔々として此の調子である。極端に申せば、私は或る種の日本人の節操と云ふものに對する解釋を疑ふものである。偶然から生じた、意思のない結婚に、果して執つて動かざるの節操があり得るであらうかと。

男子中心の良妻主義は不可

併しながら意志は絶對に自由なものであると云ふは認むることが出来ない。自由意志の説が漸く意思必至論に一步を譲つて來た事は、深い根據があるからである。唯だ私は在來の様に頭から決め込むと云ふ事が悪いのだと思ふ。年頃になつたら片付くと云ふ考へが危いのである。其れには種々な條件が附隨すべき筈であるがなかにも意志の一致、愛情の一致趣味の調停と云ふ様な、概括的に云へば、氣分の合致した人同志が、共同生活に入り、生涯の侶伴者となるといふ風でなければならぬと思ふ。

此の點に就て、女子にも結婚其の者に對する、十分の思慮の餘地を與ふべきである。男子を中心とし男子に都合のよい、良妻賢母主義は、此の意味で女子を滅

ぼすものであると云へる。女子の自覺夫れが却つて、女子に取つても、男子に取つても、つまりは人類全體に取つて、幸福を齎す所以であらう。私は日本の女子の節操は、鍛錬されたものではないと云ふ事をも、屢々知識階級の人々から聞いて居る、考へて見れば其の筈である。個人としての人格を認めない女子、人生に對する理解を缺いて居る女子に獨り節操のみの固い信念があると云ふことはむしろ奇蹟であらう。

枝葉の沙汰より根本の改革

最近に社會的問題として騒がれた某子爵の若夫人の情死問題に對して、學習院のある人が、誠に申譯けがないと申譯をして居られたが、教育家などは、義理が固い方がよいから申譯も結構だが、今の學校制度で殊に、前に述べた様に結婚問

題などには『當らず、觸らず、主義』の教育家があんな問題に自責任を負はるゝと申すのは、少しく妙な感じがせぬのでもない。教室の平面的な道徳論が、人生の微妙な細かい點まで、一々支配するものであると思はるゝならば、其れは教育家の獨斷である。一方に於てあの様な問題は、世間には多々潜在して居ると云ふことは、多くの人が漏して居る言葉でも察せらるゝではないか根本を決めずに責任を負ふの負はぬのと云ふのは、聊か稚氣の沙汰と申す外はない。

女はなほも美しき玩弄物か

どうも議論が脇にそれるが、又本問題に立ち戻つて、日本の家族制度の下に於ても、もう少し女の人格を認めて、結婚の問題なども、もつと合理的に運ぶ方法は

いくらもある。唯た如何にせん盲目的な慣習に囚はれて居ること、生活と云ふ事を馬鹿に物質的に解して居るから、正常な考が湧いて來ぬのだ『喰つてさへゆければ』と云ふ言葉は、中流以下の結婚の場合に、必ず重大な前提となつて居るか  
ら驚くではないか。既にこんな考へだから、既婚の女子は男子から生活資料を供給される事を、尤も男子を尊敬すべき所以である考へて『稼ぎ人』が大に權力を振り廻す事になる。女は今の處愛撫され、平穩無事に日が送れば、先づ以て幸福な人と目されて居る。其の間に何等人格的獨立の觀念がない、要するに女は美しい玩弄物である。

彼の泰西の劇場に、幾萬の觀衆を呻らせたといふ、婦人問題に多大の暗示を與へたイブセンの書いたノラの家出の時の言葉は、そつくり日本の凡ての家庭の女

の生活状態を表はして居る。——男女が對等の人格者となるまでには、幾多の歲月を要する事であらう。

斯くの如くして一派の人は、婦人も職業を有つてさへ居れば、獨立な人格者となれると云ふが、これも當つて居らぬ。生活資料に重きを置いた點に於て前者と同じ誤りに陥つて居る。國家に於て、納税者たる人民は、歳入の根源なるが故を以て重んぜられるのではないと同様に、男子が生活資料を得ることは女子の子を産むの働きに比して少しも、より以上誇るべき資格ではない。否根本に於て、女子は女子なるが故に尊くなければならぬ。生活資料を男子に仰ぐは人生共同生活の然らしむる所ではないか。

青年男女の交際を前提とす

然らば何を以て之れ等結婚の弊風を矯正するかと訊かれれば、勿論青年男女の交際によると云はざるを得ぬ。女子は男子の雄々しい氣風により、男子は女子のデリケートな氣風によつて、大に善い感化をうくることが多い。青年時代、眞に女性を了解せぬ日本人は、老いては後は女を機械の様に考へるのが當然である。但し現實の問題としては、直ちに實行難が生ずるであらう。度々繰返して申した様に、未だ未だ日本人には男子も女子も人格が完全に出て居らぬから今現状のまゝで青年男女の交際を開放したら、實に由々しい事件だと云はるゝであらうし、又其れは事實である。故に私は、先づ家庭の両親の監督の下に於て、兄弟姉妹の如く、何等邪氣のない頃から、男女子をして平氣に交際せしむる氣風を、徐々に養つて欲しいと思ふ。七歳にして席を交へすなごゝ云ふ事は、もとより既に

邪氣のある格言だと思ふ。それは危険だ、何となれば、一度は必ず戀愛に落ちるからと云ふ人があるかも知れぬか、其の時は正々堂々と結婚すればよいではないか。之れを愛なきの結婚他人より強いらるゝの結婚に比して萬々である。日本の老人や教育家は、妙に過去の事を忘れる癖がある。自分達の若い時は圓滿完全な黄金時代だと思つて居る。しかしこんな自惚れで若い青年に當るからいけないのだ。決して老若融和の所以ではない。厳格な監督の下にも眞の愛情を忘れてはならぬと同時に私は若い人達にも、眞に人格的の修養を切望する次第である。

### 家庭と女中の問題

#### 一 恰も奴隷に似た女中の地位

近來荐りに説かるゝ婦人問題や、労働問題中の女工優待法などの例外をなして居る婦人の一劃がある。これが即ち「女中問題」であつて、其の位置は恰も家庭工業に於ける徒弟、見習などと同じく到底集團的のものとして概括的に研究することの可能な所からして不等に閑却されて來た。輓近此の問題に關してポツポツ説を立つるものを見るが、一として纏つたものはなく、婦人問題中殊に女中問題は其の前途遠遠であると云はざるを得ぬ。

けれども女中も亦た女である、人である、婦人問題の例外となるべきものではない。

なる。

一體、義務責任の觀念は、古來非常に發達して居たが、權利思想と來ては丸で幼稚であつた我國では、凡て下級者が上級者に對して自己の思想感情を有りの儘に表白すると云ふことは極めて少ない。軍人社會、官吏社會、實業家社會、至る所滔々として而らざるはない。既に教育ある堂々たる知識階級にあつても左様であるから、教育の低い少女などが、他人の家に傭はれの身となつた以上、彼等は殆んど現代に於ける奴隷と云つても差支ない境遇にある。古歌に、「無理を云ふ主人の前の理屈をば、思ふ様には云はれざりけり」と云ふが、彼等は理屈を述べる所ではないのだ、四六時中不規則な、雑用の一切を負はせられ、主人よりも主人の子女よりも種々雑多な命令を受けて、營々として働いて居る。元來が教育がなく

育ちが悪い少女などが多いから、此の生活状態は彼等を導いて實に憐むべき低級な人間にして仕舞ふ。然るに在來の道徳上、女は創造的頭腦や反撥的精神は乏しいが、受忍力は頗る強いので、斯の如きミゼラブルな下女生活に對しても、あまり多くの疑問を挾まずに『せう事なしに務めて居る』と云ふ次第である。

今では昔の様に三度の食物の量をさへ吝むと云ふ家は少ないが、其れでも家庭生活が科學的に純一になつて居ない結果、混雑と煩瑣と、澁滯と、魯鈍とが彼の女中生活の全部を蔽て居る。

## 二 家庭生活を科學的にしたい

私は女中生活や一般婦人生活を整調する前提として、日本の家庭生活をも少し科學的にしたいと考へる。恁う云ふと少し六ヶ敷く聞えるが何も左様大きく取る

には及ばない。今までは詮方がないとして、これからの教育を受ける婦人によつて主宰する、家庭殊に臺所などは、其の與へられた經濟の範圍内で、出来るだけ合理的にやつてゆく様にしたい。料理でも、衣服でも、住宅でも、裝飾でも乃至は交際にも左様であるが、殊に臺所の改良が必要である。

家庭生活の繁多を出来るだけ齊一に純一にして、女中などにも出来るだけ餘裕の時間を與へてやりたいものだ。此れは主婦としても、女中としても繁多な生活を捨て、簡易生活に入り、自己の修養と云ふことになるべく多くの時間を得るために必要な先決問題である。

そして望む所は形式の複雑よりも内容の豊富なものにしたい、料理なども在來のものに満足せず、云はゞサイエンスフィツク、クツキング(科學的料理法)を

下女にも修得させる様にした。又一人の主人の歸りを待つがために、家中の女中が夜更くるまで起きて居なければならぬと思はれる様な悪習慣をやめにした。い。そんな事をするから暇さへあれば居睡りばかりする様になるのだ。せめて女の雑誌や料理の本や、裁縫位は習へる様に、簡易な生活を主とし、下女にも十分の安眠と、相當の食事を彼等の正當の權利として認めたいものである。

要するに睡眠の不足と、營養の不良と、雑務の疲勞とのために困憊し切つて居る女中を救ふことは、やがて其の家のためにも、子女のためにも幸福である事に氣付かなくてはならぬ。

### 三 下等な傭人を使ふ者は下等

嘗て經濟上人道に重大な問題として、奴隸制度を存すべきや廢すべきと云ふ問

題が争はれた時は、全廢論者の重なる理由の一として、奴隸の様に低級なものを永年使用して居ると、やがて其の使用までが能率の低いものになつて了ふと論じた事があるが、これは大に理由のあることである。又現代の資本主と労働者の關係にした所が、一方の利益は他方の損と云ふ唯物的な關係ではない。否物質上からも労働者の地位の上進は、生産率の増加を來たすと云はれて居る。同様に、女中の優待は優待する主人側にも利益たるものが少くない。

殊に子女のためには女中の知識を上進させることが最も必要である。私は低能な子守や、悪賢い女中が子女に與ふる悪影響を痛感する毎に、進むで女中のために計るべき多くの問題ある事に氣付くのである。

且つ又、此れ等の利害關係を除外して見ても、女中も亦た人格者であると思は



くに至つたのだ。獨逸などは既に戦争以前に此の傾向を示しはことは、同國の職業統計が證明して居る。

私の考へでは、若し女中の生活が在來の状態を改むるなくんば、むしろ此の傾向を當然とするのみならず、婦人其の者のために此の傾向を勧めたい。乍併眞に私の望む所は全く之と反對である。

### 六 女中の爲めに計るべき事共

私にはどう考へても今の傾向が根本より祝すべきものとも思はれない。上、中流の家庭はより多く女中を要求して居るし、又女給とか賣子とか云ふ人達の生活が決して幸福なものではない。果して左様だとすれば結論は明白である。要求するものは自ら優遇の方法を考へて、獨り自己の用務を便じしむるばかりなで、

ふ程積極的な計劃は立てかねる。云はゞ社會問題として先づ第一に各家庭の改善に埃つの外はないと考へる。それが即ち困難な問題たる所以である。

### 五 女中の不足は當然の傾向だ

近來漸く女中を得るの困難の聲を聞くが、これは寧ろ當然の傾向と云はざるを得ぬ。其の原因を釋ぬると何と云つても女中の生活状態に對する不満足のためである。と云へる。と、同時に今では何も必ずしも女中たらざるべからざる必要もない、婦人のためにはより簡易な、より安樂な、より多く金になる職業の激増しつつあるに依るのだ。手近い例を云へば各工場の女工、商店の賣子、女給、すこし上等な所ではタイピスト、女の役人と云つた様な具合に、女中見習の様な囚はれた窮屈な生活をせずとも仕事はいくらもある。斯くして到る處女中拂底の聲を聞

なくてはならないではないか。

四 女中も將來は人の母である

目前の利害から打算して女中を苛酷に取扱ひ、其の結果魯鈍な人間にしてしまふことは、單に女中一人のために憐むべきのみではない。彼等も亦やがては嫁して母となるべき女性である。女中と雖も將來は國民の母となるべきものであることを忘れてはならぬ。小學校を漸く終了した後直ちに入つて女中となり、一年に二度の安息日の外自由に外出することが可能ないので、非常に世間を狹隘にして居た彼等が、どうしても立派な母たることが出来やうか。勿論、當然低かるべき彼等の將來の地位に於てすら、女中生活が却つて災たることが多きはないか。しかも現在の状態では、私は女中のために學校を設けることか、集會を開くことか云

低い頭の彼等を教へて其の地位に安んぜしめ、一方堅實な家庭の空氣のうちにあつて彼等をして實際的感化を受けさせなくてはならない。私は何故從順や謙抑やを女性の唯一の徳の如く考へる人の多くが、今の女の世間に出て働かざるを得ざるに至らしめた、女中の生活状態の改善に着目しないかを疑ふものである。

婦人職業問題の必要を説く人は、動もすると經濟的獨立を力説して、經濟的獨立を得さへすれば獨立的人格者になれるからと説く、此の説から推せば女中の如き生活よりも、立派に職業の看板を掲げて兎も角月給生活の出来る地位を讚美するかも知れない。乍併、もし經濟的獨立のみに着眼すれば、出で、月給生活をしたとて其れで獨立な人とはなれぬ。其れは家庭内の壓迫は薄らぐが、やは

り月給を支拂ふ地位にあるものから見れば從屬者ではないか、方便とすれば兎も角、理論としては經濟的獨立が人格的存在の必要條件ではないと思ふ。親に依つて生活して居る子供にさへ人格はある筈だ、私は此の意味からして出来る事なら多くの月給に依つて生活せんとして居る婦人が上、中流の家庭の女中見習として其の生活に依つて立派に婦徳と、知性との教育が出来るやう女中生活を改善する様に世間に對して希望したい。但し、斯く云つたからとて直ちに契約時間外の仕事は何もしないと云ふ程窮屈な、極端な權利思想を鼓吹せずともよいであらう、そんな機微な點は人々の工夫に一任する外はないではないか。

社會を眺めて

此の一篇はすべて家兄石井宗吉氏の筆になつた感想文である。しかしやはり私と同趣旨のものが多  
ばかりでなく略同じ雑誌を籍りて發表したことがあるのでそれらの縁因から貫ひのせることとした。

### 時代錯誤の喜劇いろいろ

世界は改造されつゝある、新しい建設の時代が来た、大正の維新が来た、國民生活の革新を要する時が来た、といふ様な言葉は前から繰り返されて居るが、今の社會の何れの方面にもそうした緊張された気分が多く現はれて居ないのは遺憾である、内面に漲つて居る新しい思想や欲求やを容るゝには今の社會は時代

をどり違へて居る事物があまりに多過ぎる、時代錯誤の現象はいろくの方面から之を窺ひ知ることが出来る、私は今その著しいものを採つて少しく考へて見たいと思ふ。

二

今の社會では年寄があまりに權威を振つて、若い者があまりに意地がなさ過ぎる様に思はれる、年寄を尊敬することは結構だ、經驗に於て、思慮に於て、若い者より年寄の方を尊ぶべきこと今更論を要しない、然しながらお正月の數を多く迎へたといふ丈で新時代の事をも委すに足るや否やは大に考ふべきことである、日本の社會の殆んど總ては年寄の世界だ、年寄といへば一も二もなく若い者よりは偉い様に思はれ、そのすることは間違ないやうに考へられる、若い者は「まだ

若い「青い」「貫祿が足らぬ」といふ月並の言葉で一概に排斥されてしまふ、そして最も元氣のあり、最も活力のある、潑刺たる二十三十の働き盛りは、常につまらない事にこき使はれて、漸く一人前の仕事の出来得る地位に就いたときは既に老朽の境に入つてまた昔日の慨のない者になつて居る、この輩は過去の經驗から得た世渡りの上の小才を唯一の武器として仕事をするから、社會の事業が多く微温的、妥協的で不徹底に了ることが多い。

私はアメリカを旅行して、若い者がバキ／＼と目のまわる様な働きをして居るのを見て羨しいと思つた、更に紐育の市長が年齒三十にも満たずしてあの人口七百萬もある大都會を負ふて活動して居るのに驚いた、無論國情の異なる外國の例を直に我邦に引用せよとはいはぬが、今少し若い活力ある者に働き場所を與へ

て見たらドーカと思ふ、兎角「若い者ではドーモ」と卑下する傾向がある、然し  
もつと若い者を信用してこれに重要な地位を與へて働かして見たら、今の年寄  
連よりは立派な仕事をすると私は考へる。ある新進作家の小説に「由良之介役者」  
といふ作がある、田舎廻りの劇團の座主が忠臣藏の由良之介の適役は、自分ばか  
りであると信じ、人もある程度迄は之を許して居つたのであるが、フトした動機  
でその弟子が代つて由良之介を演じたら、却つて上手に出来たので座主の貫祿が  
疑はれて来た、といふ筋である、これも年寄萬能の社會を諷した一種の皮肉と見  
ることが出来る、私はこんな由良之介役者が社會のあらゆる方面に多いではない  
かと思ふ。

人材の爲めに廣く門戸を解放して盛なる、經論を行ふことが時務の緊急なるも

のである、その爲めには政界に選舉權の擴張も必要であらう、官界に任用令の改  
正も必要であらう、人材をして充分に働かしむる組織を必要とする、桃太郎も桃  
の中に入つて居ては鬼ヶ島の働きが出来ない。

三

日本の所謂實業界には極端なる階級思想、いひ換れば官僚式の氣分がある、大  
きい會社の内容を窺ふと何々の課長とか部長とか係長とか、理事とか參事とか、  
まるで官廳その儘の職制をしき、職名をつけて其の順序の繁雜なること、階級の  
錯綜せること驚くばかりである、某と某とは月給が若干違ふとか、某は係長なり  
某は課長なりといふ風に人を種類別にして、その上に重役といふものが御大名の  
様に威張りちらして、官廳や軍隊でも見得られないほどの官僚式を發揮して居る、

一寸した仕事をするにも發案、合評、決裁といふ様に廻り廻つて書類には徒らに印判の數を増すのみである。ゴムバルドはその名著「資本主義の神髓」(Quintessence of Capitalism)で近代資本主義の一現象は大きいことを争ひ、速いことを競ふ點にあるといつて居るが、日本の事業界では徒らに大きいことを街ふのみで何處に事業の簡易と敏捷を見出す事が出来やうか、無論事業の組織や秩序や又仕事の上に人の名譽心を利用することも必要であらう、然し今日の事業界の如きはあまりに甚だしい時代錯誤だ、丁度二三十年前の官廳の組織を今に模倣してゐる様なものだ、そのお手本の官廳の方は近時著しく簡單になつて來た、私は事業界に於ける任用令の改正を望む者である、最新の文明を誇りとする事業界の識者の猛省を促したいと思ふ。

四

現代の社會に就て深い觀察眼を有して居る厨川白村氏の時代錯誤觀の一事例に、日本の舊式な道路の上に歐米の最新式の自動車走らすの事實が擧げられてある、尤もの事だと思ふ、私は茲に日本の旅行者にとつて一番不愉快に感ぜらるゝ宿屋に於ての時代錯誤を考へて見たい、在來の宿屋ほご妙なものはない、まるで下手な外交官の商賣の様なものだ、宿ではお客の身なりや、持物や、風采やで待遇を定めようとし、お客の方では宿のもてなしの如何によつて茶代を手加減しようとする、双方で掛引して居るわけだ。

旅をするもの、不安と不快の念の多くはこの宿屋の掛引にあると思ふ、こんな取引が文明國に現存して而もあまり深く之を考へて居る人がないのは更に驚くの

外ない、私は何時も旅行を想ふ毎に不愉快なる印象としてこれを思ひ出す、旅して宿に着くと入口に世間を涉りぬいたといふ顔をしたお神か、または意地の悪そうな眼付の番頭が居て、自分の頭から足の先きまで見つめ、持物に一瞥を與へた後に室が定まる、それから面倒極まる宿帳なるものを付けていよく待遇が定まるのである、而も其の旅舎の多くは襖一重、甚だしのいは障子一枚隔てた丈で他の客と隣り合ひ、公德心の乏しい所謂「旅の耻はかき捨て」主義の無遠慮極まる振舞を見聞かされ、さては眠ることも出来ない程の不完全なものだ、私は日本の宿屋がもつと眞面目な取引を爲し、外國のホテルの様に改善さるゝ日の一日も早からん事を祈る者である。

五

白村氏は更に、日本の花柳界なるものは徳川の末期の廢頽時代に成れる時代錯誤的の遺物だといはれて居る、私はそれと同じ様な現象を今の劇に見出すことが出来ると思ふ、一般の人は芝居といふものには昔ながらの型があつて、それは我々の思考を入れる餘地のないもの、様に、只無條件に臺詞や身振りに隨喜の涙を流して居る、其の内容が現代思潮の琴線に觸れて居らない、甘まい繪草紙を見るやうなものでも、一向おかまいなしで大事な涙をしばつて見物して居る、私は骨董品を珍重する意味に於て特種の藝術としてならばこの種の劇をも尊重するが、一般人が時代思潮の象徴とし、社會娛樂の唯一のものとする意味に於ては受取り難いと思ふ、我々の共鳴し得る劇は題材を古いものに採つても、もつと深刻な現代の思想に觸れ又は生活に近接したものでなければ——いひ換へれば我々の手近



なものでなければならぬ。

劇の内容が観る人々の間に斯の如き時代錯誤があるばかりでなく、其の興行方法がまた時代をはき違へて居る、一分時を争ふこの多忙な社會に何事ぞ、芝居は正午から夜の十一時までも連續するといふ呑氣極まるものである、そして其れを觀に行く人は未明から起きて支度をして開幕の二時間三時間も前から寄かけて居る、丁度一日一晚を費すわけである、これでは芝居を見た様な氣がせぬといつて居る。あまり御念の入り過ぎた娛樂ではあるまいか、私は國民がもつと文藝といふことに醒めて來る時期のあることを確信して居る、その爲めには「國民劇」といつた様なものが早く起つて一般の文藝思潮を導くことを希望する。

六

物價騰貴といふことは近時の流行ものになつて居る、生活難の叫びは新聞雜誌にかなり強く發表されて居る、然し翻つて國民にこの難局に處する丈の覺悟と用意ありや否やに考へ及ぶと甚だ心細く感ぜられる、只政府に依頼するばかりでこの位緊切な問題に遭遇しても、眞に強く自分の生活を考ふる者が少ない様に思はれる、卑近を例な擧げて見れば相不變和洋兩様の不經濟な二重生活が行はれて居る、下駄も買はねばならぬ、靴も求めねばならぬ、傘も要る、傘洋も要る、和服も着れば、洋服も着るといふ風で總てが二重になつて、中流社會の者の生活を甚だしく苦ましめて居る、歐化もよし國粹保存も可なりといつた様な折衷的の風習が何時までも持續され、而もそれが文化の發達と慾望の進化とにつれて、ますます複雑になつて來ていよいよ生活費を膨脹せしむることゝなる。

物價問題に對しては無論生産の方面を考へねばならぬが、私はそれと同時に「消費の整理」といふことに深く省みてこの時代錯誤的の生活状態を漸次整理して行く必要があると考へる、今日に於ては單に節約といふ如き空漠たる考へでは到底駄目だ、消費の内容に立ち入つて深く思を致さねばならぬ。

七

次ぎには婦人問題が旺になり、婦人の自覺といふことが高唱されて來た今の時代に、皮肉な對照として婦人の衣服に於ける無自覺といふことを擧げて見たい、人は今の婦人は其の地位や趣味やあらゆるものに目醒めて來たといふ、然し婦人の衣服に就て見ればこれと反對の證左が得らるゝ事を悲觀する、奇を衒ひ、艶を競ふ今の婦人の衣服裝飾が日本の家庭生活に果して適應して居るかどうかは姑く

別問題として、その流行といふものが只受動的のものであり、模倣的のものであり、一向に生活化され、趣味化されて居ない、其處に何等個性の閃きも窺ふことが出來ない、只流行といふものに無抵抗に服従して居るばかりである。

婦人が男子に對して流行着を欲求することは丁度猫が首輪を貰ふに類して居ると皮肉な批評をして居る人もある、昔ながらの流行といふ盲目的勢力に征服されて居る婦人は無自覺といはれても何等辯明の途はない筈である、婦人問題の高調されて居る現代にこの現象あるは亦時代錯誤の一喜劇たるを失はぬ。

八

現代社會に於ける時代錯誤的の珍現象は之を擧げんとすれば限りなく腦裡に思ひ浮ばれて來るが、私はこれ以上煩はしく書き出す事を見合すであらう、私の心

からの願望は一般の人が只在來の傳統的風習に盲従を爲さずしてもつと己の生活や、趣味や、思想やに就て考へる國民になつて欲しいといふ一言で盡きて居る、從來の我々はあまり因襲にのみさらはれて居てあまりに考へなかつた、昔ながらの事物、在來の風習を先祖から其の儘に引繼いで更にそれをその儘後繼者に引渡すことを以て、人生の能事了れりと考へて來たもの、如くに思はれる、これがために社會の一部の事象は世界的のスピードで急速に進むでも、他の事物は極めて遅い歩み——寧ろ停滞——でてくつて居る、其の結界時代の錯誤の喜劇を各方面に現出して居るのではあるまいか、我々はもつと深く強く考へねばならぬ。

## 汽車旅行の感想

願へば私が「アメリカ」の東部を旅行して居るときのことであつた。「シカゴ」の繁華を後にして、「ナイヤガラ」の瀑布を見物し、「ポストン」に出て紐育行き汽車に乗つた、獨り旅の私は車中はからずも、日本の若い紳士に逢つた、萬里の異域に旅する者の誰も同じ様に感ずることで、故國の人に會遭するほど喜ばしいことはない、私共はいつしか久しい間交際した友達の様に懇意になつた。時は秋の仲ばであつた、車窓からの眺めを尙一層わがものにしたいた爲めに、私は「オブザベーション」(展望車)へ行くことをいひ出し、やがて二人は列車の一番

後に美しく整へられてある眺めのよい室へ移つた。汽車は今「ボストン」から紐育への海岸線を矢のやうな速力で走つて居る、海は見えないが、沿線の紅葉燃るが如く、その間に白聖の建物が點々として「外國の秋」といふ一種の強い色彩を出して居る。

「オブザブーシヨン」の中には私共の外に十數名の外國人が居つた、その中に十歳ばかりの愛らしい男の子を連れだした婦人があつた、私共は何時しかその小供と仲よしになつて笑ひたわむれて居る、そのうちに友人は小供に日本の萬歳を教へるといつて、兩手を擧げさせて萬歳と教へ込まふとする、小供の方でも萬歳といふ口調と兩手をあげる態度がおもしろいので熱心に真似て居る、すると

今迄私達が小供相手に無邪氣に遊んで居るのを傍で笑つて見て居つた母人か、急に氣色を改めて小供に「ホールド、アツプの眞似を教へてはいけません」といつた、その態度のあまりに嚴肅なのに友人は一寸面喰つて、私の方を見た、私はそのとき、これはとんだ誤解だと氣が付いたから友人に耳打ちして、小供に教へたのは「ホールド、アツプ」ではない事を（ホールドアツプ）とは後に説明する如く強盜の用ゆる言葉で短銃をつきつけ「ホールドアツプ」即ち手を擧げよと命じて財物を強奪するものである。辯明し、萬歳の意味を説明すると婦人は始めて事の真相がわかつて笑ひ出した、私達も大笑ひした、車中のもものも皆笑つた、

○ 「ホールド、アツプ」と萬歳、強盜と祝賀、なんとひどい誤解ではないか、個人

と個人、國民と國民との間に事情を了解せざる爲めにこの様な恐ろしい誤解を來すことが澤山ある、單純な笑話的な出來事ではあるが、私は「アメリカ」の旅行——而も紅葉燃ゆる秋の汽車の旅で、日米國人間の小さい笑ひ話としてこのことを今に強く記憶して居る。

「ホールド、アップ」で思ひ出すが、「アメリカ」にはこの種の強盜が多い、讀者は活動寫真などで御承知かも知れぬが、夜街を歩いて居ると氣味の悪い様な男が突然ピストルを突きつけて「ホールド、アップ」と來る、このときすなほに兩手をあげないと命をとられることもある、兩手を舉げさせておいて悠々とポケットを探つて金銭、時計などを奪ひ去るのである、「アメリカ」の盜坊の多くはこんな荒つばい手だ、日本の竊盜のやうな技工的のものは少い様だ、この「ホールド、アッ

プ」は夜分に限らず白晝も出ることである、時には電車を強迫することもある甚だしいのは進行中の汽車を停めて乗客を脅かす事もあるさうだ。

此等は皆悪いことだが、一體「アメリカ」人のすることは荒つばい、私は今考へても身振ひのするやうな競技を見たことがある、その一つは「オートバイ」(自働自轉車)の競争で、周圍四五十間を出でぬ圓形の板がこひの内で、其の壁にひつついて、横になつて空を走るのである、のろい速力では落ちてしまふといふことで、五十哩乃至七十哩のスピードを出してゴールと恐ろしい音を立て、幾十回となく走り廻る、そのうちには衝突が出来る、死傷者が出る、それでも平氣で新

モ一つは自動車の競争で、桑港萬國博覽會の會場周圍三哩ばかりの處を廻るのだ、午前十時から始まつて、途中で雨がふり出したにも拘はらず、ビューノ、走つて居る、午後になつたら終りかと思ふと中々やめない、トウ、晩方の五時頃まで寸時も休まず走りつゝけた、其の根氣の強さ、體力の強さには驚き入る外ない。かういふ荒つぽい競技を、私共が永く見て居ると氣が遠くなる様に感ずるが、米人は平氣でそれを興がつて見物して居る。

米人は荒つぽいばかりでなく、大まかだ、學校などを參觀すると、日本の學生ほど細かに勉強しないやうに見える、彼等は學校ばかりが勉強場ではない、社會生活をも通じて一生懸命強するといふ風に、大きい者へ方を教へつけられて居る

○  
 様だ、又大きい建築などになるとペンキを塗るに手であることをせず「ポンプ」で塗り立て、居るのを見た、その爲めに少し位ペンキの付かない處や薄い箇所があつても左まで氣に留めない、つまり大體の調和、要領さへ得られてあればよいといふ考へと思はれる。

○  
 話しが思はず脇道へ入つた、再びレールの上に戻つて私は今少し汽車の思ひ出を語るであらう、こんな荒つぽい、大まかな「アメリカ」人が、秩序を要する、禮讓を必要とする社會生活の表面に出ると、まるで打つて變つて、繊細なる處まで注意することに、私は「二度ビツクリ」せざるを得なかつた、公會堂、劇場、料理屋其の他公衆の集る場所のことも一通り書いて見たいが、わき道に立寄るこ

とを見合せて、列車中の所見を述べる。

私は今でも思ひ出す、あの整つて居る「アメリカ」の汽車の設備と、それを利用する人達の秩序の正しいことを。黒人のボーイは一寸見ると一向働きのない様にボンヤリして見えるが、中々落付いて居て、要領よくお客の世話などをする、時々塵を取る道具を持つて来て丁寧に通路の掃除をして居る、塵をこる道具といつたが、實際塵以上のものは車中にないのである、何處にも一片の紙きれを見出すことが出来ない、況んや煙草のすひ殻や果物の皮をやだ、列車中には大きい鞆などはその影も見せぬ、乗客はお互に他人の迷惑になるやうな大聲を出さぬ、人に不快の感じを與へるやうな服装はせぬ、ときに列車の烈しい動きがあつて自分の肩が隣りの人の肩先へ一寸さはつてもすぐ「御免なさい」といふ、ものを問ひ、話

しをしても愛相よく愉快に對話する。

總てが落付いて、秩序があつて、居心地のよい感じがされる、このやうな車中の秩序、お互同志の公德心の整つて居るのを見て、私はその社會生活といふことに付ての訓練の行届いて居るのを心から羨ましいと思つた。

私は「アメリカ」から歸朝して後、しばらく日本の汽車旅行をした、殊に東北地方を多く乗り廻つた、その旅の度毎に何時も私は車中不快の感を起さずには居られない、無作法、我利、排他、などの言葉をいくら並べてもいひ表はし得ぬほど亂雑なときがある、大きな鞆や包をいくつも持ち込んでわれ先きにご席を奪つて、後から來た人が席がなくて困つて居つても一向おかまひなした、通路は煙

草の吸ひ殻や紙きれや果物の皮などがむやみに捨てられる、大聲で歌ひ出す者もあれば、肌ぬぎになる者もある。車中はまるで無政府状態だ、その社會的訓練のないことに驚く、そのくせ我々は平生知人同志では馬鹿丁寧ではないか、七重の膝を八重にも折つて、型にはまつたお世辭をも並べて居るのに、一度社會といふ広い場所へ出ると、全く此等の義理や秩序が其の姿を隠してしまふのは不思議といふ外なところ。

○  
新しいものと、古いものと本來は時代を異にするべき様な社會の事物が、同一の時に存在し、相互の間に調和を缺いて居る現象を指して、時代錯誤といふ語が用ひられて居る、我邦にはこの時代錯誤の現象が尠くない、雨が降れば泥田と化し、

風が吹けば砂塵を飛ばす東京の道路に、歐米の最新式の自働車を走らすのが如きは此最も卑近な例であらう、前に擧げた汽車の旅客の如きも此一例ではあるまいか、折角文明の立派な道具があつても之を利用する者は昔の「旅の耻はかき捨て」といふ時代の旅行以上にあまり訓練されて居らぬ。

○  
日本人は本來人を愛し、同情に厚く、且禮義に正しい國民である。それがいろ／＼の傳統性で此の如き大事な社會的訓練を疎外して來たのを遺憾に思ふ、話はずも「旅の感想」から「社會問題」へと入つて來た、私はこれ以上、讀者を煩すことをせぬ、只國民の間に此等の訓練の早く行渡ることを希望して擱筆する。

(八一七一—二五)



## 乗客の公德心に就て

(鐵道現業員諸氏の爲めに)

一  
私は本誌の前號に日本の旅行と外國の旅行とを比較して、汽車乗客の公德心に著しい厚薄があることをお話しました、丁度其の頃に鐵道院は新しい試みとして普通列車の一等車を廢止しました、それと同時に從來の二等客の無作法を矯正する目的で、その反省を促すために、公德心に關する注意書きを印刷して世間へ配付したといふことを聞いて居ります。此等は何れもよい事だと思ひます、併し愆を云へばもつと早く實行さるべきことであつたのです、一等車の廢車といふこ

とは民衆化とでもいふか、階級、因襲の型を改めて行かうとする新時代の要求に適合するものであります、また實際に於てもこれ迄の様に、多くの場合「一等車」と書いた空箱を引いて走るのは不經濟なことです。  
こうして一等車は廢止された、從來一等に乗つた人達は二等車へ入つて来る、さてこの二等車なるものが、新しいお友達を迎へる丈けの用意が出来て居るかどうかといふことに思ひ及ぶと甚だ悲觀せざるを得ませぬ、前號に話したやうな列車中の我利、混亂無秩序な状態が目前に見える如くになつて、不愉快な氣分になつて來ます。

二  
一體日本人ほど丁寧な禮儀に厚い國民が、何故にあんな無作法を演じて考へず

に居るのか了解の出来ないことです、また之を氣付いた社會の識者も、官廳も、新聞も、雑誌もなせもつと早く國民を醒覺させる方法を講じなかつたか、これも了解の出来ないことです、社會の總てが一齋射撃して、無作法を陥落せしむべき筈であつた、今日までの醜體を持続させたのは文明國民の大なる耻辱と云はねばなりません、然るに意外にも鐵道院が配付したといふ注意書きに對して反對の聲があります、それは東京のある有力なる新聞で「自ら反省せよ鐵道院」と題し、乗客の無作法を咎める前に爲すべき多くの施設ありといふ前提で、汽車の設備の悪いこと、日本人の服装が歐米人と違ふことが無作法の主なる原因だといふやうに書いて居ります、そして歐米の廣軌列車には概ね車室外に廊廓があつて、乗客は此處に出て、時々倦怠を癒すことが出来るが、日本の列車は一人當りの座席

が狭く、常に鮪詰の有様であるから自然倦怠も増し、無作法の露出は避け難きこととなるといふ趣旨で論じて居ます。

三

この記事はよく注意して讀めば、公德心の問題を全く看過して居るものとは思はれませぬ、現に他の箇所とも國民の共同生活の觀念云々と書いてあります、つまり汽車の説備をより完全にしたい爲めに、其の方の主張が強くなつて公德心のことが弱くなつたのだと見るのが穩當だと考へます。併しこれほど穿索せずに一寸讀み下すと、乗客は悪くない汽車が悪いのだ、日本の服装が可かぬのだといふ様にとられます、從來無責任な無作法な乗客はこれをよい口實にして「ソラ見ろお客が悪いのではない、汽車の方が悪いではないか」と逆振を食はせるかも知れ

ませぬ、つまり彼等の逃口實に利用される虞があります、折角公德心の喚起されやうとしたよい時機に措しいことをしたと思ひます。

四

私は公平なる國民の一人として茲にお話して居る者ですが、公德心のことは汽車の設備や服装とは別個の問題であります、日本の汽車はまだ大に改良されるべき處があります、服装のこともよほど考へなければなりません、併し我々は現在の汽車の設備、現在の日本の服装の下に於ても、もつと公德を重んじ、共同生活の秩序を尊重せねばなりません、如何なる口實を以てするもあの無作法を見逃すべき遁辭とはなりません、成程外國の汽車には廊廓の設けがあります、併し誰も其處へ行つて寢そべつたり、「ふとも」を露出したり、痰唾を吐いたりして居るも

のはありませぬ、鯨詰になるほどの汽車に大きい鞆や包を幾つとなく持込んで座席を獨占したり、一人丈長々と寢て他の人は小さくなつて居るやうなことは愈々以て不都合の次第です、また私共が外國の例を引くのは何も歐羅巴の通り亞米利加之儘のことをせよといふのではありません、彼方で前向きに坐るからと云つて横向きに出来て居る日本の汽車にその眞似をせよといふは無理なことです、また和服を着て洋服を着たと同じやうな姿勢を作るといふことも無理な注文です、我々の望む所は今の設備、今の服装でも、もつと紳士らしくして欲しいといふにあります、あの混亂状態は如何なる理由を以てしても宥恕さるべき筈でありませぬ。

五

從來國民の間には兎角誤りたる排外思想がありました、西洋飯を食ひ、洋食を

着け、ペンキ塗りの建物に入つて居ながら一度外國の思想といふことになる。極力之を排斥しやうと努めます、公德心のことも薄つべらな洋行歸りのいふことだなど、冷笑に附して居る者があります、併しこれは外國模倣ではないのです、日本人の様な禮讓に厚い、同情心に深い國民が社會生活上に爲すべき當然の務であります、平生知り合ひの間で至つて丁寧な、情深い人達が旅に出たからと云つて、あつた無作法を演ずるのはあまりに矛盾なことです。

鐵道現業員諸君！公德心の問題に就ては、諸君は世の謬論に惑はさるゝことなく、深い強い信念を持つて之が矯正の途を考へられ、國民のため、社會のために努力せらるゝことを希望します。(八一八一—二二三)

### 春となりて新人愁多し

春が来ました。今私がおか自分の感想を書き出そうとしてペンを手にして居ると、窓外にはまだ冷たい風が吹いてをって、時々ペンを離して火鉢に手を隠したいと思ふ位の寒さです、老人達がよく手紙の書き出しに用ゐるやうな、「春寒料峭」の気分が感ぜられます。併し旬日を出でずして、麗かな春の日影はこの小さい私の書齋の窓にも、さし込むで来ませう、更に今書いて居る原稿が、印刷になつて讀者諸君の目に觸るゝ頃には眞に一宵値千金の春となつて居ます。これまで都の春に縁の薄かつた私は、數年を外國に、また幾年かを東北の雪の中に送りまし

た、今年こそは歩き勞れるほど、財布の空になるほど、花見に行き給へ、春の氣分に浸つても見給へど、友人から好意半分、嘲笑半分の注意を受けて居ます。暖かになつて、着物が軽くなつて、行く處として花ならざるはなき春にこそ、生き甲斐があつたやうな伸びくした心地がします。總ての餘裕があつて、京都や、奈良の春の心ゆくばかり賞したらごも思ふことがあります。山と水との趣に富める嵐山に花を配した幽雅の姿や朱の社のほごりに群を成して居る鹿の背に時ならぬ雪の降りかゝる風情などが、錦繪をるやうに長閑に美しく思ひ浮ばれて來ます。

二

かやうな春の氣分を何等の餘念なしに味ひ得たならば幸福かも知れませぬ、何

等の條件なしに之を賞受し得らるゝならば結構かも知れませぬ。併し私には花咲く春を其の儘に歡賞し得ざる軽い憂鬱があります、それは櫻咲かざれば春の心は却つて長閑かなるべきを歌つた古人のやうな哀愁的のものではなくして、花見人の習性に對する一種の國民的反省ごでも云ふべきものであります。

外國人は日本の特徴を指すときには、何時も、櫻花と富士山ごを持ち出します、チエリー、プロツサムとフジヤマと云へば完全に日本を徵象するものゝやうに考へて居る。永い間、日本人が無暗矢鱈ごこの二つを持ち出して御國自慢をやつたことが外人の腦裡に浸み込むのです、これは結構な事ではあります。成程櫻の花は美しいに相違ありませぬ、また富士山の秀麗なることは論のないことです、併し、この花は僅か四

五日のうちに散つてしまひ、その山を眺め得らる、場所とても日本中の僅かな部分です、國民が明けても暮れても只之のみを同伴者とするやうでは少し心細いやうな感じがします。

三日見の間に咲き揃ひ、夜半の嵐に散つて行く櫻の花の如くあれど、教へられて来た國民性には、敏捷恬淡の長所は充分にあるも、持久や徹底力に於て頗る缺けて居る所があることを注意せねばなりません、見切りが早い丈、粘着力に乏しい、總てが其の日暮して倦み易く執拗性を缺く、何時も花見の酒に酔ふて居るやうな氣分で、深い思慮を致さないことが多い。殊に世界大戦の影響を受けて、所謂成金國になつてからはこの傾向が著しくなつて來ました、社會改造などといふ聲ばかりは外國並に喧しいが、何れの方面にも一向其の實は擧がらない、こ

の大切な時代にいろ／＼の喜劇的現象が現出されて、其の姿が益々醜くなつて行くことを洵に遺憾に思ひます。

三

先づ我々平生の極手近な材料に依つてお話しして見ませう。私は活動寫眞を時々見に行きます、活動寫眞は民衆的娛樂の質を充分に具へて居ります、第一には在來の芝居のやうな長時間の悠長なものでなく、忙はしい都會人に適當して居ること、第二には安價で平等的であつて、從來の演劇のやうな階級的觀念のないことに於て長所があります、然るに日本の活動寫眞の如きは此の特徴を裏切つて居る、徒らに場所の等差を設けその上甚だしい不廉な入場料を取つて居ります、金のうなつて居る米國でさへも活動寫眞の料金は最高二十五仙に過ぎませぬ、それ

に何ぞや、懷寒き邦人が八十錢も一圓も出さなければ、觀られないといふが如きは實に言語同斷です、デモクラシーの旗じるしなどは恥しくて到底出されたものではありませぬ。

それからこれは卑近な事例ですが、我々日常飲みものにするサイダーの如きも實に滑稽なものです。あのやうな簡單なものが一本三十錢もして、中學校卒業者の月給を以てすれば一日にサイダー二本を飲めば他に衣食の途もないといふ如き不合理なものを、何等の考へなしに國民は常用して居るのです。

更に話を變へて電話はどうです、文明國民の衣食よりも必要と云はれて居る。この大切な利器は一般人の利用すべからざるものとなつて居る。外國なれば申込んでから遅くも四五日には我卓上のものとなり、而もそれが學生の小使錢を以

てしても出來得るほど簡單なものが日本では數年、十數年もかゝつて、夫れは數千金の高價を持し、投機利喰ひの目的物となつて居るといふ次第です。

道路を御覽なさい。雨が降れば泥田と化し、風が吹けば砂塵を飛ばす、到底お話しにならない代物です、外國人は日本の道は近藤さんか、淺野さんでなければ歩けまいと云ふ、何故と反問すれば、この人達はポートを持つて居るからと答へます、船でなければと皮肉を云はれるほどの道路です。

電車はどうです。乗るのではなく積み込まれるといふ方が適當でありませう。あの混亂状態を想へば全く愛相が盡きる、輕業を知らぬ人には電車は禁物といふても過言ではないのです、電車に付ては私はこれまで種々の雑誌やまた著作にも書きました、今は繰り返していふ程の元氣もない、文明國、一等國の看板に泥を

途るやうなあの電車を考へると實に情なくなつて來ます。  
このやうな事例は擧げ來れば、殆んど際限がありませぬ、國民生活の環境は此の如き矛盾や錯誤に満たされて居ります。

四

併しよく考へて見ればこのやうな物質方面の問題は何時かは改善、改造の途が開けて來ませう、それよりも大切な問題は精神方面である、私は前の國民性のことに立返つて今一度穿索する必要があります。

倦み易く、執拗性に乏しく、總てに徹底力を缺くことが我々の最も反省すべき點であることは曩にも一言した所でありませう、これが最近の社會事象に於ても著しく顯はれて居ります、早い話が労働問題のやうなものです、昨年あれ程

世論の焦點になつた労働問題も本年に入つては、餘程下火になつたと云はれて居ります、雑誌や書物でも労働問題は鼻について來たといふ態度です。日本人は實に氣の早い國民です、歐米諸國で數十年も百年もかゝてまだ到底決着のつかぬ問題が此の國では僅か一年か二年でもう忘れられるとは驚くより外ありませぬ。健忘性にも程があります。或人は日本は思想の通過する邦だといつて居ります、オイケンとかベルグソンとか哲學物を追ひ廻したのは既に數年前のことです。それからデモクラシーが出、今の話の労働問題が出馬してマルクスといふ片假名を解し得ない者は人に非ずとまで思はれました。併し、これも馳せ過ぎて、次には過激思想が問題になりました、之も遠からず通過するとすれば、また元へ還つて官僚思想でも轉回して來て謳歌されるやうになりませう。かくして國民を貫徹せ



る大思潮といふものはなく、遂に日本人に宗教なし、哲學なしといふやうな皮肉な言葉を浴せらるゝやうになります。

國民の性情は櫻の花の如く美しきを望みます、併し我々は花見衣のやうな、けばくしい、薄つぺらな着物を脱いで實質な仕事着をつけて、もつと底力のある考へを有たなければなりません。(九、三、二七)

## 人格主義の提唱

### 殺人事件を中心として

——人格主義の提唱——

最近突發して世人を驚倒せしめた戦慄すべき農商務省官吏の殺人事件や其後に至つて報導せられたある豪商の子息の窃盜事件などから漸く我國現在の高等教育に疑問を挾むに至り、「徳育の破産」とまで叫ばれたことは事象に依つて當面責任者を反省せしめんとする精神はもとより慶祝すべきであるが私は此の問題に關し教育當局者の責任問題とするに先立つて少しく考へて見たいと思ふ方面がある。

私は何等個人的關係もなく又一回の面識さへも有せざるものであるが曩に農商

務省の少壯參事官として敏腕の令聞があつた塚本氏が其の榮職を弊履の如く捨て、傳道の聖職に就くべく内村鑑三氏の門下に走られた記事を一讀し、一般世間が成金思想に浮かれてをる昨今、學校を出る青年の多くが其の得らるゝ報酬の少しでも多い場所ならば、それが自己の志望に適してをると否かを問はず甘きに集る蟻の如くなる時に於てかなり痛快を感ぜざるを得なかつた。乍併世間の人々はかゝる一年少官吏の去就を注意するにはあまりに多忙である氏が去就問題も亦通常茶飯事として雲煙過眼視されて仕舞つた様であつた、けれども私の目から見れば殺人技師事件よりもこの塚本氏の去就の方がはるかに注目すべき現象であつて所謂一葉の動くを見て風位を察する底の觀察力のある人はこの一事件に依つて現代官界の風潮、並びに青年官吏の間に蟠る思潮等に付いて大に論究すべき筈であ

つたと思ふ。然るに此の輕視されて居た塚本氏の辭職がはしなくも俗惡極まる——然も事件が起る前日迄は異常な敏腕家として卓抜な米通として人も我れも許して居た所の一技師の殺人事件に依つて好個の對照を示し、一層陸離たる光彩を放ち思想ある青年のために萬丈の氣焰を吐くに至つたのはむしろ一種のアイロニーとして頗る興味ある様に思はれる。

青年官吏から若き使徒へ、其の動機が那邊にあるにもせよかなり著しい變化である。而して敏腕家から殺人犯へ、これも亦一足飛びの變化である。而して私は官界から傳道界にゆかれた人に就ての詳しい批評はこゝに論ずるを措くとして、かくの如き精神的の苦惱を味はつてゐる人も、かゝる問題はまるで閑人の仕事として唯目前の事務を片付けてをる人も常時にあつては兩者の間に少しも異つ

た價値を認められないばかりでなく、ある場合には精神的に物事を思考することは冷静に事物を處理する妨害をなすものであるとまで思はれて多くは放膽的な又は無思慮な場當り家や、小手先きの利く人間の方が歡迎されてをつたことを今にして思はず居られない。

若しも直截な言葉を用ゐることが許されるならば此の國では從來文藝が青年を蠱毒してゐると一部の人々から曲解されてをる以上に、實際に於て空疎々漫な東洋風の豪傑肌や洒落な運動家的氣分が人を傷けてゐたことを先づ注意したいのである、私達は中學生時代から此の點に就いてこの位誤れる先輩の忠告や、教師の訓導を受けたかわからない。よく室内に居て文學書を読むたり、生硬な人生觀を考へたり、文筆を弄むたりすると兎角人間は陰氣になる。青年に陰氣は大禁物で

ある、だから剛健とか豪宕とか云ふことを單に肉體的の頑健といふ意味に取つてをる人は精神修養などは身體を強健にすることのやうに考へそんな暇があつたらば運動をやれ、駆歩でもやれとまるで青年が落付いて物を考へることや独自の工夫、慎獨の修養をすぐ罪惡でもあるかのやうに云ひ做して、之を馬車馬的に訓練しやうと努めたものが多いし又現にそんな舊式な考へで青年に對してをるものがかなり多いのである。誤られたる體育、誤られたる青年の指導、それが將來に於て大なる禍となることを人も知らず世間も悟らぬ社會は眞に悲しむべく、哀れむべきものではあるまいか。私は青年と靜思、青年と思索、そこに實に重大な意義を認めてをる一人である、年齢若しと云つて其の油然と湧き來る悲哀、人生に關する疑ひなごに就て深き思ひを致すことをことさらに避くる必要を認めな